特 109
743

實用家庭全書 第四篇

下田歌子女史序
中川愛水先生著
山村耕花畫伯口繪
久保鋼水氏裝訂

東京 いろは書房發行

大正
6.10.18
内交

始

特109.
743

四季の園藝をよみて

下田歌子

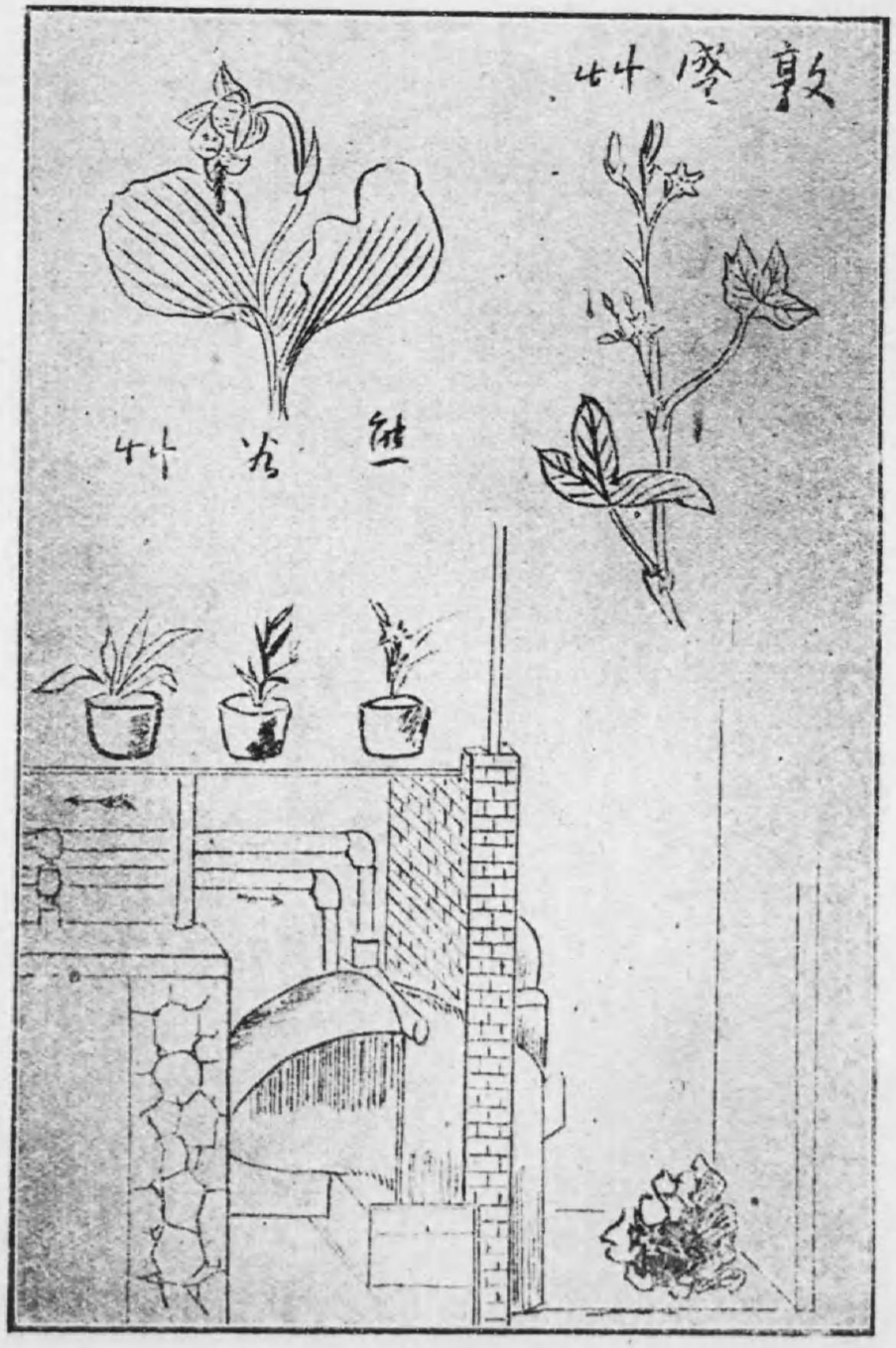
つちかひしの
園生の花〳〵に
いろ
心つくしの
あとも見えつゝ

山村耕花先生筆

美しき花

接木と挿木

温室と其草花



四季の園藝のはじめに

花卉を栽培するといふことは、最も興味の深いものでありまして、たゞ咲いたばかりの花を賞する人の想像も及ばぬ愉快を感ずるものであります。

咲いた花を賞するのは、一面に花の末路を弔ふものでありまして咲かせるまで、如何に美麗な、如何に珍奇な花を見るかの、これを育てる長き間が樂みであります。

大凡種を蒔く季節、その好める土質、または肥料、一通りの育て方を覺えさへすれば、あとはすべて經驗に敎へられるのでありまし

て、そのまだるく感じられる經驗を、氣永く樂んで積むやうでなければ、到底花をつくる興味に到達するものでありません。

家庭には花卉を栽培する餘裕と、それを愛翫する趣味がほしいものであります、そして家庭の空氣を清くしたものであります、その園藝の豫備智識は本書によつて得られること、思ひます。

大正六年五月の初

中川愛氷誌

挿畫

□其一　日本の花、西洋の花、その容姿に、その風韻にそれ〴〵特長があります、近來栽培の工夫によつて、まだ見ぬ花のさま〴〵に咲くのを見るやうになりました、こゝに載する花、洋花の最も多く人に知られたものであります。

□其二　挿木接木は、花卉栽培に最も興味のあるものであります卷頭挿む所の圖は、その仕方を示すものであります、さりとてはよく工夫したものではありませんか。

□其三　溫室は暖さ殺ひの花卉を保育し、また季節を狂はせて咲かせるに必要であります、數盛草と鶯谷草とが一つ溫室に、葉を交へ美を競うて咲くなどは妙であります。

四季の園藝

目次

一、家庭と園藝……一
二、丹精の興味……三
三、無經驗の經驗……四
四、園藝の用具……七
五、土質のいろ〳〵……八
眞土……九
赤土……一〇
溝土……一三
黃土……一〇
砂土……一二
田土……一三

肥土　一三
腐土　一三
普通の合せ土　一四
合せ土と花卉　一四
土壌の試験　一五

六、肥料のこと……一六
下肥　一七
厩肥　一七
泥水　一八
米洗水　一八
玉子の殻　一八
干鰯　一九
油粕　一九
松魚節粕　二〇
硫酸アンモニア　二〇
智利硝石　二一
過燐酸石灰　二一
硫酸加里　二一
肥料の與へ方　二二
水の與へ方　二三

七、種子の取扱……二四
種子の採り方　二四
種子の撰擇　二六
種子の蒔き方　二七
種子の貯へ方　二六

八、成育の注意……二八
耕すこと　二九
心を採る　三〇
草を除る　三〇

九、株分……三一
その一例　三一
その二例　三二
その植方　三二

一〇、取木……三四
地上の取木　三五
空中の取木　三五

一一、接木……三六
接木の用品　三七
臺木と接枝　三九
腹接　四〇
挿接　四一
水接　四一
寄接　四二
切接　四三

一二、挿木……四二
肉挿　四四
葉挿　四五
撞木挿　四六
植挿　四五
玉挿　四六
芽挿　四七
一三、草花の育て方……四七
福壽草　四八
水仙　四九
かたばみ（オキザリス）　五一
勿忘草（フォーゲット、ミー、ナット）　五三
麝香連理草（スヰート、ピー）　五五
瓔珞牡丹　五五
上り藤（ルーピーナス）　五七
燕子花　五八
花菖蒲
雪割草　四九
櫻草（プリムローズ）　五〇
香菫（ヴアイオレット）　五一
牡丹　五二
芍藥　五四
天竺牡丹（ゼラニューム）　五五
溪蓀　五六
唐菖蒲（グラヂオラス）　五七
五九

庭石菖　六〇
巾着草（セルセオラリア）　六〇
飛燕草（ラニクスパー）　六二
麝香撫子（カーネーション）　六三
石竹　六四
百合　六六
夏菊　六七
蓮　六九
布袋草（ウオーター、ヒヤシンス）
金魚草（アンチルリヌーム）　七一
百日草（ヂニア）　七二
美女櫻（ウアーベナ）　七二
鳳仙花（バルサム）　七四
筑波根朝顔（ペツニア）　七六
月見草　七七
鳶尾　六〇
花菱草（エツシユショルチア）　六一
撫子　六三
伊勢なでしこ　六四
鷺草　六五
鈴蘭（リリー、オブ、ゼバレー）　六六
夏水仙　六八
睡蓮（ニンフエア）　六九
姫金魚草（リナーリヤ）　七〇
千日紅　七一
螢草　七二
朝顔　七三
夜會草（ムーン、フラワー）　七四
芙蓉　七六
七七

松葉牡丹（ポルチュラカ）　七八
翠菊（アスター）　七九
金鶏菊（カリオプシス）　八〇
虞美人草　八一
含羞草　八二
鑢斗菜（コラムバイン）　八三
紫蘿蘭花（ストック）　八四
金蓮花（ナスターチユーム）　八五
射干　八六
矢車草（センタウレア）　八七
紅花（サルヴイヤ）　八八
たまきんぽうけ（レナンキュラス）　八九
萩　九〇
女郎花　九一
紫苑

松葉菊　七八
天人菊（ガイラルヂヤ）　七九
孔雀草（タゲーテメ）　八〇
泊夫藍（クロッカス）　八一
遊蝶花（パンシー）　八二
あつもり草　八三
小町櫻　八四
金盞花（カレンデユラ）　八五
向日葵（ヘリアンザス）　八六
旌節花　八七
曇華（カンナ）　八八
桔梗　八九
藤袴　九〇
龍膽　九一

鶏頭（セロシア）　九二
秋海棠　九三
除虫菊　九五
寒牡丹　九六
シクラメン　九八
トリトーマ　一〇一
ダリーア　一〇二
ミムラス　一〇三
コスモス　一〇四
アネモネ　一〇五
フリージア　一〇六
トレニア　一〇七
マーガレット　一〇八
アルメリア　一〇九
レナンキュラス　一一〇

雁來紅　九二
菊　九三
寒菊　九五
スノードロップス　九六
シネラリア　九七
イキシア　九八
ロベリア　一〇〇
ヂキダリス　一〇一
ヒヤシンス　一〇二
シレネ　一〇四
チューリップ　一〇五
アマリリス　一〇六
アルテナンセーラ　一〇八
ベニコヤ　一〇九
ゲロキンニア　一一〇

ハルシヤギク 一一
フロックス 一一三
ヘリアンサス 一一三
ヘリオトロープ 一一四
カリオプシス 一一五
切花の水揚 一一六
ホクシア 一一
プリムラ 一一三
ニジエラ 一一三
ペントステモン 一一四
ランタナ 一一五

一四、木花の育て方……一一七

梅 一一七
桃 一二〇
木瓜 一二三
海棠 一二三
薔薇 一二五
柘榴 一二六
いご 一二八
椿 一二九
櫻 一三〇
木蓮 一三三
藤 一三四
石楠花 一三六
木犀 一三七
合歡花 一三八

山茶花 一三八
黄梅 一三〇

一五、花卉の栽培に就て……一三〇

花壇と花の色 一三一
買つた花と育てた花 一三三
花卉の一年 一三三
花卉の名品 一三四
茶 一三九

一六、観賞蔬菜の育て方……一四二

土筆 一四四
芹 一四五
豌豆 一四七
蕗 一四八
茗荷 一五〇
八つ頭 一五一
西瓜 一五三
胡瓜 一五五
花菜 一四四
石刀柏 一四五
蕗 一四七
蓼 一四九
薑 一五一
茄子 一五二
甜瓜 一五四
蔓紫枝 一五六

菜豆 一五七
扁蒲 一五八
玉蜀黍 一六〇
防風 一六一
唐辛 一六二
刀豆 一五七
絲瓜 一五九
三つ葉 一六〇
山葵 一六一
慈姑 一六二

一七、花の住所……一六三
花園 一六四
花壇 一六五

一八、苗床の温冷……一六六
冷床 一六七
温床 一六八

一九、盆栽に就て……一七〇
種類 一七一
肥料 一七五
鉢 一八一
培養土 一七四
盆栽愛好者と品格 一七六
根占石 一八二

苔 一八三
盆栽保護 一八四

二〇、觀葉盆栽……一八六
松 一八六
扁柏 一八九
樅 一九一
吐松 一九三
樫 一九四
梧桐 一九七
楡 一九九
沙羅双樹 二〇一
楓 二〇三
錦木 二〇六
八つ手 二〇八
苗木 一八五
温室 一八五
杉 一八八
眞柏 一九〇
欅 一九二
榧 一九四
槙 一九五
公孫樹 一九八
桑 二〇〇
百日紅 二〇一
櫨 二〇四
柳 二〇六
南天 二〇八

蔦　二一〇
竹　二一三
葦　二一六

二一、觀花盆栽（くわんくわぼんさい）……二一九

辛夷　二一九
夾竹桃　二二一
秋の七草　二二二

二二、觀果盆栽（くわんくわぼんさい）……二二三

桃　二二三
梨　二二六
杏　二二八
無花果　二二八
櫻桃　二三〇
栗　二三二
棕櫚竹　二三二
石菖　二二三
仙人司　二二七
連翹　二三〇
天女花　二三二
柘榴　二二五
李　二二七
枇杷　二二八
苹果　二二九
葡萄　二三〇
柿　二三二

胡頽子　二三四
柑橘類　二三六
橘　二三四

二三、本書の終（をはり）に……二三七

目次終

四季の園藝

中川愛氷著

一　家庭と園藝

人として道樂のないものはありませぬ、世間から見てあの人に何の道樂があるものか、と云はるゝほど無趣味に見えても、その人にはそれ相當に道樂はあるものでありまして、その道樂が實利的であるか、娯樂的であるか、高尚であるか、下品であるか、他人や家族とゝもに樂まるゝものであるか、自分一人に止まるものであるか、

更に自分以外には迷惑をかけるほどのものであるか、といふ風に相違して居るだけであります、そこで家庭に於て申分のない道樂はといへば、私は園藝に如くものはないと答へます、美しく咲く花卉の色、いかなる人の目にも樂まれ、新らしく實る菜果の味、いかなる人の口にも喜ばるゝ筈であります、かくて兒童に美しき感念を起さしむるも、家内の空氣を清うすることが出來るのも、園藝によつて得られる譯で、いづれの家庭にも、是非この園藝の趣味を行渡らせてほしいのであります、併し道樂といふほどに偏つて、其收穫に多大の欲望が加はりますと、寧ろ執着に囚はれて、却つて樂みに飽き家庭より其趣味を他に轉ずることゝなります、されば家庭の園藝は

不十分ある所に、十分の快味を受くるのに、その價値を認めたいのであります。

二　丹精の興味

花卉を培養するのは、恰も育兒と同じことであります、殊更育兒法を學ばないで母となつた人が、兎にも角にも育兒が出來て行くのは、多くは育てる兒に育て方を敎へられるので、そこに注意と不注意とがあります、その注意深き人が、經驗ある人の育兒法を參考しますと、それこそ鬼に鐵棒であります、花卉の培養も、花卉に敎へられて、初めて完全な培養が出來るので、希望に向つてする丹精が

慈愛となつて育兒せらるゝ如く、花卉に對する慈愛が、興味を感じさせるのであります、他人に育てられた花卉は、花の咲いた時のみの樂みでありますが、自分が種を蒔いて培養したものは、芽を出した時から未來を樂され、かくて得た一輪の花、一顆の實も、なかなか尊いものでありまして、その丹精にかち得た愉快は、到底門外の人の窺知ることは出來ませぬ。

三　無經驗の經驗

先年私は書齋の前に六坪ばかりの庭がありますので、何か植ゑゝ見たいと思ひ、ある農園で茘枝と刀豆に千成瓢簞、それに朝顏の種

を買ひとゝのへ、庭へ播くことにしました、妙な取合せと笑ふ方もありませうが、刀豆の花は大きくて、南洋の蘭のやうで、如何にも風韻があり、それに實の下つた姿が雄大で、それを千成瓢簞の棚から下るのに附合せ、茘枝の實の美しいのとが、いづれも俳味があるのと、それを潤色するに朝顏の花も惡くはあるまいと思ひ、かう揃へた譯であります、所でかういふ事には全然無經驗でありました、そこで種を蒔く場所を撰ばねばなりませぬ、後には屋根へかけて棚をつくる計畫がありますので、庭の中央を横に一文字に、種を下すことにしました、土地を肥すことに工夫して、取極めた一直線の地を、堀かへして溝をつくり、其底に魚の腸を布き、その上に野菜の

切屑を置き、その上一尺ばかり堀かへした土を篩ひかけ、やゝ小高き畝をつくつて、件の種を蒔き、發芽したのを程よくまびいて、瓢簞、刀豆、茘枝を各四本づゝ取交せ、朝顔は一本隔に絡ませることにし、十二本の添竹を挿し、その上に屋根へかけて、井桁の棚を渡しました、種を蒔いたのは五月の中旬で、六月の中旬には添竹が入用になり、七月中旬には棚が出來て、思ひ〳〵に花をつけ初め、八月中旬より豫定の如く、千成瓢簞に刀豆もぶらりと下り、茘枝は日毎に黄みて赤き肉をはじき、朝顔はその間を縫うて、色どり〳〵に咲き、九月下旬に至る迄、家族はもとより、來訪の人にも喜ばれてよき樂みをしたのでありました、茘枝の如きは百個あまりも實を黄

熟せしめたので、少しも不成績とは思はれません、勞力としては最初一度に埋込んだ肥料の手數と、添竹とそれに棚を取付ける世話と添竹に蔓を絡ませる介錯とだけで、約五ヶ月間繼續的に刻々に樂むことが出來ました、それと同時に、以上四種の草花に敎育せられ、其培養にも少からず會得する所がありました、そして私の園藝に趣味をもち、多少の工夫を積むやうにありましたのも、この時のたまものであります。

四　園藝の用具

何をするにも道具が入用であります、能書は筆を撰ばずといひま

すが、能筆ほど筆を撰びます、何の道でも同じことで、技とゝもに用具を吟味して參ります、園藝にしてもさうでありますが、家庭の餘興にする位で、さう揃へるには及びませぬ、遣ひよい手輕な鍬代用の鋤、鎌、鉈、それに生花に用うる鋸に木鋏位あれば澤山であります、鉈を魚庖丁で間に合はす位でよいので、あまり專門的になつて、趣味の上走りをせぬやう、老人や小兒等と共同の娯樂にある程度にしたいのであります。

五　土質のいろ〳〵

素人が土質の吟味まではなか〳〵むづかしいのでありますが、土

壤は花卉果菜の住宅とも見るべき大切なものでありまして、花卉果菜にとつて落付きのわるい土壤には、滿足に成育して花實を見ることは出來ませぬ、恰も人の住心地如何を云ふ如きものであらうと思ひます、されば土質に就て多少の智識は得たいと思ひます、去ながら科學的に研究するにはあまり大袈裟に過ぎますから、こゝには素人の參考にある程度に、平易に記述したいと思ひます、これを參酌されて、實地に土質を風味せられ、花卉果菜の那染む土壤を會得せられたいのであります。

眞土

一般の庭園や軒下などを堀れば出る土でありまして、砂土と粘土

が適當にまじつて居まして、肥料分も多く、最も融通のきく、申分のない土であります、就中砂氣の多いのが、各種の作物に歡迎されます。

黃土

粘氣のある土で、普通の土地を二三尺堀れば出ます、水を吸ふ力が多い爲に、草花樹木を移植するには、至極適當の土質でありますが、一利あれは一害ありで、水はけの惡い爲に、吸收した土が粘りそれが乾けば固くなりますから、外の土壤を交ぜて其短所を補ふやうにしたいのであります。

赤土

日當りのよい山の上を堀れば多く出る土でありまして、粘り氣のあるのとないのがあります。

砂土

水はけが至つてよい爲に、水が溜つて植物の根を腐らす憂ひはありません、その代り他の土壤のやうに肥料分は少しもありません、桃や西瓜南瓜などは、この肥料分のない水はけのよい砂土を好みます、盆栽には是非ともこの砂土はなくてなりません、その砂土にいろ〳〵種類がありまして、山のは鑛氣があり、海濱のは鹽氣があり濁れる川のは汚物を含んで、樹木の爲には宜しくありません、清き流れ川のが第一で、山の上層にあるのがその次であります、また色

は白いのより薄黑いのが役に立ちます。

溝土

溝より掬うた土を、天日にて一週間ばかり乾かし、水氣を蒸發させ、臭氣を銷散させたものを、粉に碎いて使用するのでありますが肥料分を含んで居ります。

田土

田の土を堀かへして、これを日當りのよい所で乾かせ、水氣を發散させて、カラ〳〵になつたのを碎いて使ひます。

肥土

これは寒中日當りのよい所へ、四方を然るべく圍ひ、その中へ眞

土に大小便を交せた汁、また小便のみにてもまきかけ、鋤にてよく搔交せ、二三度太陽にかけ、土にしませます、全く乾くまでは肥料の流出さぬやう、菰か蓙をかぶせて、雨や夜露を防ぎます、さうして春の彼岸頃になりますと、臭氣のない普通の土となります、かやうな事は、普通の家庭では出來ない事でありますが、他より取よせるにしても、その性質だけは知つて置くのが、便利であらうと思ひます。

腐土

塵芥や落葉、庖丁屑などの類を堆植したのが、腐敗して土となつたものでありまして、これが園藝上最も大切なものであります、

普通の合せ土

田土と赤土と、眞土とを等分にまぜ合せて、大小便の下肥をかきまぜ、一月あまりも天日にあてゝ乾かしたものであります。これは普通廣く用ひられます、家庭で之を造るのにはあまりに不潔であります。

合せ土と花卉

花卉によりて前述する通り、土壤に好嫌ひがあります、隨つて合せ土の必要が起ります、盆栽果樹には眞土五、溝土二、砂土一、腐土二の割合、同觀花植物は眞土五、砂土三、腐土二の割合、同觀葉植物は眞土四、腐土三、砂一、溝土二、球根類には眞土三、溝土一

砂土二、腐土四、球根以外の草花類は眞土二、砂土一、溝土一、腐土六、菊は眞土三、砂土一、腐土一、ダリヤは砂土一、眞土三、腐土六の割合で、朝顏の如きはその種類で大差があり、大輪物ならば眞土三、砂土一、腐土五、溝土一、獅子咲ならば眞土一、砂土一、腐土一、牡丹咲ならば眞土二、砂土一、腐土一といふ割合が、先人の經驗した調合例であります、これとても各自の研究をこの上に試みられ、生物を取扱ふ心事の、飽くまでも杓子定規にならぬことを希望いたします。

土壤の試驗

酸性を含有する土壤は作物に有害でありますから、石灰又は木灰

を之に混和する必要があります、輕便にその有無を試驗するには、その土壤を少しばかり小皿に入れて、それへ蒸溜水を注いで、その中へリトマスと稱する青色の試驗紙を觸れて見ます、もしその土壤が酸性でありますと、右の試驗紙が赤色に變じます。

六 肥料のこと

肥料は植物の滋養となるべきもので、その成育上極めて大切なものであります、去ながら食傷させぬやうの注意も、また大切なことであります、物は極端に走つて、蒔いた種の成育するに任せて、米洗水一度施さぬのもあれば、無闇に多大の成功を期待して、過度に

各種の肥料を用ひる人もありますが、その中庸を行きたいものであります。

下肥

下肥は等分の水を混じて用ひますが、取扱ひに臭氣と不潔を感じますので、家庭での園藝には用ひずともの事と思ひます、されど西洋では用ひませぬ。

厩肥

これも腐土の材料などには至極適當で、効能も多いのでありますが、取扱上下肥についで不潔を感じますので、家庭には遠慮してよからうと思ひます。

泥水

泥水を汲み、米洗水にまぜ、そのまゝ二三日置き、その上水を掬うて用ひます、草花の培養には必要で、その根へ蒔くのでありますが、多くは面倒でありますから、泥水のまゝ掬うて、草花の根にかけます。

米洗水

これもそのまゝ用ひます、肥料の最も手取早いもので、よく役立されます、最初の濃い汁を桶にとり、其上澄の水をすくうてまくのがよいのであります、どうも粕が利くやうにも思はれますが。

玉子の殼

よく萬年青の鉢などには、二つに割つたのが俯伏せになつて、一つの形容を成して居りますが、肥料にはその殼を石にてくだき、すりつぶして、盆栽の根を堀つて入れるのであります。

干鰯

細くたゝいたのを、摺鉢などで更に細かくすりつぶし、施すべき花卉の根を輕く堀つて入れ、もとの通り土をかぶせるのと、以上の如くにして細かくした干鰯を、熱湯を注けてそのまゝ二日ほど置きその汁を根へかけるのとあります、

油粕

これも干鰯と同じく、細末にすりつぶして、根へ埋めるのと、細

末を十分煮しめて、そのさまゝ汁をかけるのと、二通りの仕方があります、すりつぶした細末を埋める時には、細く切つた藁をその上に置いて、土をかぶせると更によいさうであります。

松魚節粕

笊にあけたまゝ二三日天日に干し、水分を蒸發せしめ、摺鉢などで細末にして用ひます、鹽氣のないのでなければなりませぬ。

疏酸アンモニア

下肥の代りに使ひます、一坪に三十匁位を一升五合の水に溶かしたのが適度であります、水に溶け易い灰白色の肥料であります、草花などのまだ多く枝葉を伸さぬうちに、少し用ひますとよくきゝ目

のあらはれるものであります。

智和硝石

これも下肥の代用になります、日光に曝すと溶けますから、日蔭に貯へて置いて、極めて少しづゝ時々用ひます。

過燐酸石灰

草花などに少しづゝ施すと、花の光澤を增します、腐土か砂などに加へて用ひると、殊によろしいのであります。

硫酸加里

これも以上三種の肥料と同じく、草花の培養などには、極めて重寶な肥料であります。

肥料の與へ方

人を見て法を說く如く、土質により、植物により、肥料を施すに其加減があります、粘り氣のある土は肥料を長く含みますから、たまさか施せばよろしいのでありますが、ばさつく土はそれに反對でありますから、時々施さねばなりませぬ、植物の肥料を吸收する作用は、毛根より一種の溶液を出し、土中の肥料を溶かして、これを更に毛根に吸收されるのでありまして、その作用を圓滿ならしむるは、土中に含める暖氣が、肥料を溶解するのでありますから、肥料を施すには、晴天に限ります、それから下肥、米洗水、泥水などは肥料の効果の速なるものでありますから、少しづゝ度々施すがよく

之に反して干鰯、油粕、松魚節粕などは、効果の遲く現はるゝものでありますから、比較的多く施すのがよいのであります。

水の與へ方

水は肥料の中に計算せられぬやうで、然も最も大切な物でありますが、殊に盆栽には一日もなくてならぬものであります、庭園の花卉に對しても、春秋には日中一度、盛夏には朝夕二回位、雨天の外は水を施さねばなりません、それも柄杓などでザブ〳〵かけるのはよろしくありません、如露にて靜かに根元へかけ、土を流し、肥料分を逃すことのなきやう注意せねばなりません、葉に撒いて涼しい風姿を眺むる爲に、一通り水を廻はす位は差支ありませんが、あまり

葉に永く露を宿しますと、害蟲の發生を促し、それが爲に葉を蠶食さるゝ憂ひがあります、水は池の水、川の水、殊に雨水が最も草木の滋養となります。

七 種子の取扱

蒔かぬ種は生へぬと同時に、蒔いた種が惡しければ、生へる花卉の麁末なのが當然であります、されば園藝の振出しはこの種にありますので、その撰擇と取扱ひは最も大切であります。

種子の撰擇

素人は信用ある園藝會社などから、其種を求めるに限ります、も

し其の發芽に安心したいと思ふ場合は、簡單にその試驗が出來ます大粒のものでありますと、深さ四寸位の木箱か植木鉢に、篩うた土を盛り、種な枝蒔にして、輕く土を被せ、更に硝子の板を渡し、室内に入れて、濕氣を與へて發芽をさせます、又小粒のものでありますと、水を浸した布を輕く搾つたのを、大きな皿に二つ折にして入れ、その折つた中に種を入れて、空氣の流通をよくしながら、蒸發を防ぐ爲に、上から又小さな皿をかぶせ、室内に入れて發芽を待ちます。これは布が濡れて居る程度でよいので、水が溜ると種が腐ります、さうして十分の八以上發芽しましたらば、その種は申分ありませんが、六割以下ならば見合せるがよろしいのであります。

種子の採り方

其花なり、其葉なり、其色なり、其形態なり、すべて批難する所のない花卉に登熟したものから、種をとるのが最もよいのであります、もし部分的に花ならば花の勢ひのよいのに氣をつけて置き、實なれば見事に熟したのを撰んで、種をとるべきでありますが、早熟の種をとれば、それから成育した花卉は早熟し、晩熟の種をとれば晩熟の結果を見ます、それでその中間の、即ち盛りの時を撰ぶのがよろしいのであります。

種子の貯へ方

取りました種はよく乾かし、空氣に觸れないやうに、よく密閉して置くのがよいのであります、その期間は物によつて違ひますが、大抵二三年は保ちます、去ながら成るべく前年の種を蒔くのが安心であります。

種子の蒔き方

もし自分で前年に取つた種を蒔くとすれば、前年にまさるとも劣らぬ成績を見るのもこれが振出して、此時から殊に興味を持つて參ります、種は水はきがよくて、而も常に濕つて居る土がよろしいので、これに少し砂をまぜますと、尙誂向になります、室内で種を蒔きますのは、櫻草、ベコニアなどの外は、平たい箱か、種皿などの淺くて廣い水はきのよい器に限ります、それに古い花壇の土に砂を

少し混ぜて入れ、それへ然るべく蒔きます、その然るべき深さといふは、種の大小によつて違ひますが、種の倍位に深みをもつのがよいのであります、そして硬い殼をかぶつて居る種は、蒔く時に少し外皮を破つて、發芽を助けるやうにします、箱蒔にした種の發芽したのを、畑に移す場合は、風のない曇天に限ります、植え終つて小糠雨に降られると、殊に申分ありません。

八 成育の注意

親はなくとも子は育つといふのは變態で、種も蒔き放して置いてはよくありません、常に注意をして、其成育に面倒を見ねばなりま

せん、それが園藝の興味であります、よき花が咲くか、よき實を結ぶかは、その成育の善惡如何にあるは云ふまでもなく、恰も有情の草花と感じらるゝやう、その親しみを持ちたいものであります、さうすれば『此花を折る事無用警視廳』などゝいふ名句は、自然に無用になつて參ります。

耕すこと

常に土を柔かくして、其中の小石瓦の割などを除き、太陽の熱を受けさせ、水も肥料も萬遍なく滲込させる爲に、周圍の土を耕しますが、次第に深くして、根の盛んに廣がる頃は、根を傷けぬやう淺く耕します、それをするには、晴天の日盛りがよろしいので、雨の

日や、曇つた日や、寒い日はよろしくありません。

心を採る

すへて蔓の延びるものは、朝顔にしても、西瓜にしても、其心を摘んで、その發育を助ける必要があります、發芽して本葉が五六枚出た頃、四五枚殘して心を摘みますと、側からまた枝が出ます、これも二三葉殘して摘取ると、花の數が多くなつて參ります。

草を除る

花卉を育てるには、雜草を除ることが大切であります、殊に頑強な雜草は、肝腎な作物に必要な光線を遮り、それが爲に温度を弱らせ、雨水のかゝるのを妨げ、それに動物性植物性の寄生物が、兎角

雜草を棲家として居りますから、蟲害病害を傳播させられ、結局雜草との生存競爭に打負けて、作物は無殘にも枯死するといふ事にも立至るものでありますから、雜草は作物の敵として、見當り次第除り捨てるやうにし、進んで此雜草を腐らせて肥料とし、土地の營養分を作物に獨占させるやうにせねばなりません。

九 株分

一つの根より幾本かの莖を出して居る、菊、海棠、水仙、百合、牡丹等の宿根植物は、株分をして其種族を繁殖せしむることが出來ます。株分といふことは、物によつて隨分むづかしいものでありま

すが、少し馴れると會得が出來て、草花を思ひのまゝに株分をし、それを成育して行くことが出來ます、時季は春秋の彼岸こうが最もよろしいのであります。

その一例

球根類の植物は、極めて生存を短く感ずるものでありますが、朝顔の朝な〳〵咲きかはるやうに、母球根は子球根をつけて、その生存の役目を引續き、母球根は衰へ枯れて終ふのであります、その子球根の發生數と度數とは、種類によつてさま〳〵であります、百合の花などは子球根の發生二年目に花が咲き、更に五六年經つて漸く花をつけるのもあります、ヒヤシンスなどは母球根の幹付の方から

縦に、十文字又はそれ以上に多く庖丁目を深く入れ、傷の方に新らしい芽を發生させ、又は球根の底を椀なりに刈つて、その子球根を生ませる仕方もあります。

その二例

甘藷、馬鈴薯、天竺牡丹など、通例秋季に堀つたものを、根または莖の著しく膨れ上つた部分を切つて、冷たくて然も冬傷を受けぬ乾燥した場所に貯藏し、それを畠に移して容易に根を出し、盛んに繁殖する、株分に頗る容易なものがあります。

その植方

右の株分をしたものを植ゑるには、その土地の畝を十分に耕して

置いて、薄い下肥に少しの水を與へ、一日ばかりそのまゝにして置き、それから根分したものを損じないやうに分けて植ゑつけ、水を與へ、薄い肥料を施します、

一〇 取木

この取木といふのは、隨分と造化を馬鹿にした訳でありますが、植物の枝または蔓などが地に垂れた場合に、どうかするとそれに土や木の葉が掛つて、そこから根が生へることがあります、それを人工によつたものがこの取木でありまして、彈力があつて早く芽を出す性質の柳、藤、葡萄、荆牡丹のやうな類の花卉が、それに適するのであります。

地上の取木

彈力のある强健な植物でありますと、出て居る枝ごとに一本づゝの苗を仕立てることが出來ます、仕方は枝なり蔓なりの端に添竹をし、土についた箇所の皮を刀物などで削り、鎹やうのもので地を離れぬやう上から跨げて打つけ、それに土をかぶせかけ、根のついた所で、臺木に屬する方を引離しますと、一本の苗木が獨立することになります、時期は春取木をするには、前年に生じた枝を用ひ、夏はその春に芽を出して發育したものを仕立てます。

空中の取木

植物を自然の位置のまゝ、鉢を二つに割つたものを、取木にする枝の兩側から挾んで合せ、濕氣の蒸發を防ぐ爲に、水苔で鉢の内部を卷き、それから鉢一ぱいに土を入れて、臺木の根を同じやうに、鉢の土に肥料分を持たせて置きます、さすればいつか鉢に根を生じますから、臺木から切放して、好みの場所へ鉢は引越します。

一一 接木

臺木へ欲する所の枝を接ぐ仕方でありまして、果物を便利に經濟的に成育せしめるとか、花を一本の樹に幾種類も咲かせて樂しむとかいふことに、接木とはよく考へたものであります、この接木法によつて、臺木と接枝との親和關係から、植物の丈を自由にし、不適當の土質を適應せしめ、隨つて氣候の好みも臺木によつて左右せられ、貧弱なる性狀を矯め、結實の時期を早め、或はその季節の適不適を變化せしめ、或は花葉の色澤をよくし、果實を大きくし、又は其香ひをよくする等、頗る興味があるばかりでなく、最も實用的園藝法であります、去ながら家庭で之を試みるには、餘程氣永く、研究に飽きぬやうにせねばなりません。

接木の用品

接木の方法は幾十種もありまして、その用具もいろ〳〵造られてありますが、簡單な方法によつて、專門家と競爭するのでなくば、

さう何もかも揃へるには及びません、併し是非なくてならぬのは、蠟と繩の二品であります。

▽接繩　と申して藁が三四本あれば、一度は接げます、細いものは一本位で間に合ふのもあります、疊表に用いた藺の古い物も、捨てずに取つて置きますと、ごく細いものは、それで用が足ります、この接繩を用ひた場合は、水を十分に含ませます、樹と樹とが接ぎ合つた時は、藁は腐つて自然にとれます、

▽接臘　は松脂を碎いたものと、密蠟を等分に合せ、鐵鍋に入れて文火にかけ、豚の脂を一分ばかりそれに加へてよく搔交せ、冷め固まらせたのを貯へて置きます、用ひ方は木綿地へ平にのばして、

縛つた藁の上から包みます、目的は樹と樹とが接合はぬうちに、藁の腐れを防ぐ爲であります。

臺木と接枝

▽臺木　は實生か挿木などで、苗の十分に生育し、二年ばかりになつたものがよろしいのであります、古い木でも接げます。

▽接枝　は臺木につぎ合せる若い枝であります、臺木と生育の割合が多く違つて來ますと、後に接目の上か下に瘤が出來ます、それが接枝に出來ると弱い木になります。

接木は樹皮と木質との間にある、カンビアム、シーヤーと稱する粘質組織が、臺木と接枝に親和せねばなりませぬので、發育の盛ん

な季節には、此親和作用がよく樹の切口を修理します、さればこのカンビアムの硬くならぬ春季に於て、多くはこの接木が試みられるのであります。

腹接

臺木の尖端を横に斷り、其一部に斜に切り目を入れます、それへ接枝の根の方を、楔の形に左右にそぎ取つて、臺木の切れに挿込み自然の枝のやうに仕立て、接いだ上を藁にて丁寧に緩やかに卷き、水を十分に與へ、それから臺木の根元へは日々水を與へ、時々薄い肥料を施します、菊、天竺葵、朝顔のやうなものも、よく接ぐことが出來ます。

挿接

臺木にまづ肥料を施し、その利目のよい方に接木になるものを、根つきのまゝ植ゑ、臺木と接枝を向ひ合つた所を双方削り、削つた所をピタリと合せて、その上に藁をまきつけ、接合ふのを待つて接枝の下を切捨てます、接合はぬうちに枯れるやうな弱い花卉は、兎てもこの挿接は出來ません。

水接

これは前の挿接の根付の代りに、水を盛つた器に接枝の下部を入れて、接合ふまでそのまゝにして置きます、接合す所を藁で卷く等の手續はふまねばなりません。

寄接

これは躑躅なり、紅葉なり、種類の變つたものを、二鉢並べて草書のX字なりに幹を双方より寄せ、そこを密接させて、藁でよくしめ合せ、接木の手續例の如くあつて、接合うた時接枝の下を切ります、そこで接合つた方は、臺木の方は赤き花が咲き、接枝の方は白い花が咲くといふやうに、一本の木に二色の花が見られ、紅葉のやうに葉を賞翫するものでも、一方は濃色の大形で、一方は淡色の縁取の小形であるとかいふに、趣が變つて面白く見られます、又接枝の根付の方は、また芽を出して、これも全く臺なしにはなりません

切接

臺木の端を縦に二寸程の長さに切り、接枝を斜に七八分切り、その切つた面を嘗めて、臺木の切口へ挿込んでピタリと當て、それから臺木を切つた皮をあて、藁を卷き、その上から土を被せます。

二 挿木

枝を切つて直ちに土に根を求める仕方で、植物繁殖上必要であります、柳、無花果などは水溜りに無造作に挿して、氣持よく根を持ちますが、多くの植物は、普通の眞土に水はきのよい砂を混ぜてそれへ挿すのがよいのであります、この挿木にもいろ〳〵仕方があります、挿枝は當年生のものでもよいのでありますが、前年生の元

氣のよい、芽の二つ三つ位發生したのが跳向で、容易に凋ばぬものゝ外は、早朝地中の水氣を十分に吸上げつゝある時に、切つて挿すのが至極よろしうございます、時期は春ならば芽を出す前、夏秋は葉や莖の未だ能く固まらぬうちがよく、晴天に限ります。

肉挿

春先元氣よく芽を出した挿枝を選び、其根の方を半分ばかり削り削つた部分にタップリと粘土を塗り、質の強い紙で粘土の除れぬやうに、くる〳〵と卷き、それに添木をします、月日の經つに從つて粘土をつけた部分に瘤が出來ます、それから入梅の最中に幹から切り放します、そして日影を選んで地面に移し、薄き肥料や、水を十

分に施します、芽の出るのを待つて、初めて強い光線にあてます。

挾挿

これは容易なる挿方でありまして、切つた挿枝を、その切口を縦に一寸ばかり裂き、粘土を小さく球にしたのを挾み、恰も龍が玉を飲んだ形になりますが、それをそのまゝ挿します。

葉挿

菊、秋海棠のやうな、葉の丈夫なものゝ、古い葉を選び、その葉を縦に少し斜に、土中に三分の二ほど挿込み、絶えず床地の濕めるやうに水や、薄い肥料を與へて手入します、どう考へて腐つて終ふ筈でありますが、手入がよいと、葉の周圍にある缺けた部分から、

莖を出し、芽を出します、芽が出れば、好きな場所に移轉が出來るのであります。

玉挿

これは餡ざしともいふ挿方であります、挿枝を四寸位の長さに切り、根の所を、眞土に砂を混ぜて水をかけ、餡をこしらへたもので包み、餡の崩れぬやうにして床地に挿すのであります。

撞木挿

これは前年發生した枝に、今年小枝の出たものを選んで、ふるい枝を床地に横へ、新しき枝が地上へ出るやうに挿します、地中へかけて逆さに撞木の形になる譯であります。

芽挿

十分芽を出した莖を選び、その莖をよい程の長さに切り、床地に挿すのであります、常盤木類は芽を出し枝に、葉のついて居るのを挿します。

一三 草花の育て方

家庭の園藝は美しくて、あまり皮肉でない草花を育てる事が、最も適當して居るのであります、次第に手際がよくなり、其成育を理解するやうになりますと、其趣味の底知れぬやうになりますが、私は主婦が家政を整理しつゝ、他人を多く累はすことなく、四季の草

花が、庭なり鉢なりに、絶えず咲いて居るやうに、と注文したいのであります。

福壽草

初春や日向に直す福壽草、と地唄にうたはれて、新年にはなくてならぬ、めでた味をもつた花であります、隨分と種類があつて、庭園へ植放しにしては二三月頃でなければ咲きませんが、此花に限つて、一月に花を見たいものでありますから、温室のやうな温い所の厄介にならなければなりません、花の咲いた後、涼しさうな場所に植付け、下肥など施し、株を大きくし、十一月頃掘出して、温かく構うてやります、とお誂通りに咲きます。

雪割草

花めづらしい新春に、白、紅、紫、絞りなどに小さく咲く、愛らしい花であります、秋の彼岸頃植替えて、温かい場所に出しますと一月になつて見事に咲きます、肥料は水を施す位でもよく、油粕を薄くして二三回もやれば、更によろしいのであります、その他福壽草と同じことであります。

水仙

風流な花として、清らかに咲く花として、新春などに床へ飾られます、種類が澤山あり、隨つて培養の仕方も少しづゝ變つて參りますが、秋の彼岸頃二三寸の深さに植込み、眞土に砂の交つた床地に

二三寸の深さに植込み、よく腐らした油粕汁などを與へ、花を咲かせて春を迎へます、球根は夏の土用頃掘出し、日に乾かして、乾いた砂の中で、植込むまで貯へます。

櫻草（プリムローズ）

莖の先に簇つて咲きますが、其形も色も櫻に似て居ります、近頃白、黄、紫、鴇、絞りなどさまざまに咲かせます、種は春の彼岸ごろ床蒔にし、芽を出してから植替へます、夏は日覆をして日光の直射を避け、冬は霜のかゝらぬやうに注意しますと、三年目の春からよく咲きます、開花後は實が澤山に出來て、自然に繁殖するものであります、野生の一輪一莖の花も愛らしいもので、其外白小町とか

乙女の袖とかいろ〳〵に命名されて、培養されて居ります、肥料は油粕などがよろしいのであります。

かたばみ（オキザリス）

黄、赤、白、紫などに美しく、小さな愛らしい花であります、春の彼岸頃種を床蒔にし、發芽した後移植します、株分をしても容易に繁殖します、空地に植えて置きますと、忽ちに其數を増します、葉は私の家の紋でありますので、私は殊に愛して植ゑます。

香菫（ヴアイオレット）

紫の一重と、白または紫の八重があつて、十二月頃から二月頃まで咲く、實に愛らしい花であります、この花から香水もとれます。

六七月頃種になると間もなく、鉢又は床地に蒔きつけ、薄く土を被せて、濕氣の切れないやうにし、三四枚葉が出ますと、暖かい所へ植ゑます、宿根草でありますから、挿木も株分も出來ます、挿木は八月頃母株から出た新芽を、砂まじりの眞土に挿し、株分は鉢に分けて三四日ばかり日蔭におき、これから日にあてます、土も常に濕って居るやうにしたいものであります、普通の菫も成育は同じことであります。

勿忘草（フォーゲット、ミー、ナット）

青藍色又淡赤色に咲く愛らしい花であります、三四月頃又は七八月頃種を蒔き、土を薄く覆うて、濕氣のある日蔭に置きます、四

五枚葉をつけるやうになって、肥土を盛った鉢、又は床に假植をし成長して一本づゝよき程に植ゑます、夏は日よけ、冬は露よけをしていたはり、肥料は薄い水肥をやります、宿根草で挿木も株分も出來ます、

麝香連理草（スヰート、ピー）

豌豆によく似た花で、色は紅、白、紫、黄、絞りなどに咲き、高尚な匂ひがあります、種は春秋二度に蒔きますが、秋蒔の方がよい花をつけます、移植すること勢力が衰へますから、鉢で成育せしめるものは鉢蒔にしますが、花園に直植してもよく發芽します、肥料は過燐酸石灰、藁灰などを施します。

牡丹

牡丹は園藝家のうき身をやつす、富貴に咲き、艶麗に咲く、花王ともいふべき花であります、株分で繁殖させますが、あまり繁くいたしますと、母株が傷みますから、接木なども宜しいのであります實生は兎角思ふやうな花をつけませぬが、その代り珍らしい花を見ることがあります、その手際まで行くには幾經驗を積まねばなりません、移植は秋の彼岸頃排水のよい土質を撰んでいたします、肥料は下肥、油粕、鷄糞などを、寒中又は春芽を出す前に、二度ばかり施します、毎年多く咲かせる爲に、花の咲いた時あまり永く置かずあとを切るとよろしいのであります。

瓔珞牡丹

花は恰も華鬘を釣り、瓔珞を懸けたやうに咲き、色は紅白の二種で、葉は牡丹に似て居りますから、この名を稱へられたものであります、秋根分して植ゑますと、翌春發芽します、肥料は薄い水肥を施します。

芍藥

美人の立てる姿に形容さるゝ、艶麗比ぶべきものなき花で、紅に白に、風姿とり〳〵に美しく咲きます、十月頃に株分をして、冬から二月迄に、根元を圓く掘つて、下肥を施します、それから花が咲終つてから十月頃まで、下肥を五六回施すと、翌年花が澤山咲き

ます、二月以後花の咲くまでは、肥料を見合します、さもなければ葉ばかり繁ります、それから花を大きく咲かせるには、よく熟した種をとつて、直ちに苗床に蒔くのが一番であります、寒地では油粕乾鰯などを、防寒に養分を兼ねて施します。

上り藤（ルーピーナス）

藤の花が倒さに咲いたやうでありまして、色は藤の花と同じであります、春秋二季に蒔いて、その秋と、翌春の花を樂しみます、丈は二尺以上にもなりますので、花壇を飾るに足ります。

天竺葵（ゼラニューム）

花の色も、蒔き方もさまゞありまして。一年中絶えず花を見ることが出來ます、種類によつてつくり方も相違して參りますが、九月頃床地に挿木し、日陰をよけ、夜露にあてます、成長の後は他に植出し、日當りをよくし、土を乾き目にし、夏は時々水をやり、冬は温くしてやります、肥料は油粕などを時々施すとよろしいのであります。

燕子花

初夏の頃咲く、あやめの姉妹ともいひたい花であります、性質が濕地を好みますから、水分の多い所に植ゑるのがよろしうございます、株分又つくり方は花菖蒲と同じことであります。

蓀

燕子花と同じ頃、同じ姿に咲きます、葉が燕子花より小さい丈の違ひであります。出生も同じてありますから、株分もつくり方も同じであります。

花菖蒲

初夏の花として、幾名所をか作るほど勢力のある花であります、美大な花を咲かせやうとするには、花の凋んだ後一本づゝに分け、古い根を去り、一株二三本づゝに分けて植ゑるのがよいのであります、また新らしい種のほしい場合は、實生にしなければなりません種は秋彼岸頃にとり、翌春苗床に蒔分け、芽が出れば朝夕水をかけ丈三寸ばかりにのびると、薄い水肥を與り、梅雨のうちに好みの場

所に移し植ゑる。翌春花軸の出る前に肥料を施しますと、種を蒔いた後二年で花を持ちます、肥料は下肥、油粕汁などがよいので、水中でも、乾いた土地にでも花は咲きます。

唐菖蒲（グラチオラス）

夏の頃赤、白、紫、淡黄色、絞りなどの花が、菖蒲のやうな葉に咲きます、秋球根を植付けて、發芽後肥料を施します、球根一個植ゑますと、翌年には五六個になりますから、その中の大きいのを植付けるとすぐ花が咲きます、但し小さいのは二年目でなければ咲きません、咲終つてその球根を貯へて置き、九月の末に再び植付けます、肥料は下肥、過燐酸石灰などがよろしいのであります。

庭石菖

四五寸位で、あやめに似た、小さい愛らしい花が咲きます、種は春蒔き、夏株分をして繁殖させます。

鳶尾

葉も花も菖蒲のやうなもので、田舎家の屋根に咲いて居るのを、よく東海道の汽車の窓から見掛ることがあります、屋根にすまして咲いて居るほどですから、極めて草質が丈夫で、株分をしても、捨てゝ置いても育つ位な花であります、花の色には紫、白に黄などもあります。

巾着草（セルセオラリア）

五六月頃巾着の形をして、白、黄、緋、班などに咲きます、六月から八月までの間に種を鉢蒔にし、乾いた土に蒔いたまゝ、新聞紙を土の代りに覆ひ、更に鉢の上に硝子板を載せ、木框に入れ、蔭に置いて温氣を保たせます、發芽してから覆を取除け、二三葉出た頃鉢又は箱に移して、木框の中に日中の強い光を避け、春になつて五六寸の鉢に移植し、更に木框に容れて置くと、季節を待つて花がさきます、肥料は花のさく前に一二度油粕を施し、花が開いてから時々水をかけてやります。

花菱草（エッシュショルチア）

初夏の頃四瓣に咲く美しい花で、色は黄と白とがあります、苗を

移植することが出來ませぬから、初めから鉢なり、花壇なり、成育させる所に蒔きますが、いつ蒔いても花は大抵同じ頃に咲きます、肥料は油粕を薄めた汁を用ひます。

飛燕草（ラニクスパー）

鳥の飛んで居る形に咲く、愛らしい奇麗な花であります、花は一重八重とがあります、色は黄、紫、紅、白或は紫紅に白條など、さまゞであります、種は春と秋に蒔きます。

撫子

種類の澤山ある、石竹に似た、愛らしく美しい花であります、秋は秋の彼岸頃床蒔にし、春を待つて移植します、挿木は開花後勢の

よい新芽を取り、濕氣のある砂土を選んで挿し、日避けをして置き翌春移植します、肥料は花さく前に二三度下肥を與ります、それに水を好みますから、よく水をかけてやらねばなりません。

麝香撫子（カーネーション）

石竹や撫子に似てまされる、匂ひのよい花であります、八重と一重とがあつて、紅、白、黄、絞りなどに咲きます、種は三四月又は八九月頃に床又は鉢に蒔き、四五葉出た頃移植し、一寸以上に延びて、目的の場所へ植替します、肥料は厩肥を原肥にし、油粕汁を二三度施します、春蒔は十月、秋蒔は翌年五月頃開きます、花は三年目が一番よろしいのであります、そして花を大きく咲かせますには

一本の枝に一個宛咲かせまして、其外の蕾は取つてしまひます、挿木によつて繁殖も出來ます。

伊勢撫子

撫子の一種でありますが、普通のに比して非常に大輪に咲きます色は白、紅、絞りなどありまして、一本の莖に一つだけさかせるやうにして、外の無駄な蕾を摘んで肥料を施しますと、一際大きく美しい花が咲きます、多くは秋の彼岸に種を蒔き、翌春一二寸に成長した所で移植します、挿木又は取木で容易く繁殖します、

石竹

八重と一重とがあつて、紅、白、絞りなどの色に咲き、花瓣の端

がなでしこのやうに割れず、鋸の齒のやうになつて居ります、秋の彼岸頃種を蒔き、發芽後移植し、後また花壇に植込みます、夏八月頃一度根元から刈取りますと、新しい芽を出して、秋また美しい花が咲きます、株分より毎年新たに蒔いた方がよろしうございます。

鷺草

白鷺の飛んで居る形の、小さい愛らしい花であります、水盤の中へ植ゑても、土地へ植ゑてもよろしいのでありますが、鉢へ植ゑますには、鉢の下の方へ砂利を入れて、其上に眞土と腐土とを混ぜたものを入れて植付けます、水草でありますから、水氣を絶さぬやうにせねばなりません、水盤へは、夏花の咲く頃、極めて淺い鉢へ入

れて、根元を小砂利でおさへて置きます、さうするとお誂通り雪白の花が咲きます。

百合

夏季白、黄、桃紅、絞りなどさまゝに、大きく美しく咲き、種類の多い花であります、隨つて土質も多少好みをかへて參ります。小球根を分離しても、又鱗片を一つ宛へがしても殖ゑます、眞土に砂を混同した床に。秋の彼岸頃深さ四五寸位に植込み、發芽の後下肥又は過燐酸石灰などを施します、冬は霜よけをする方がよいのであります。

鈴蘭（リリー、オブ、ゼ バレー）

谷間の姫百合と申して、四五寸位の丈に、大きな葉つきから、白色で釣鐘形の花が鈴のやうに吊下つて咲く、愛らしい花であります球根を十月頃から三寸位の深さの温床に植ゑる。半蔭にして培養しますと、二三週間ばかりで咲きます、此花が日光の直射を嫌うて、日蔭に繁茂します、肥料は時々薄い水肥を施します。

夏菊

夏菊も秋菊をつくる丈の丹精さへすれば、それに劣らぬ花が咲くのみならず、夏菊はまた夏菊の風韻があります、六月頃から七月へかけて咲くものでありましし、花が咲きましたならば、成るべく早く莖を根元から切り、そして水肥を充分に施しますと、その根元か

ら芽が澤山出ます、それを九月頃堀出して、一本づゝに分けて、よきほどに間隔をあけて植付け、芽摘をして肥料を充分にかけ、冬期は霜よけをして、苗を保護して置きますと、翌夏豫定の如く見事な花が咲きます。

夏水仙

彼岸花に似た花でありまして、俗に葉見ず花見ずとか申しましてそれは葉のある時は花がなく、花のある時は葉がないからでありまして、春の彼岸頃種を蒔けば、翌春か三年目の夏花をつけます、開花前と凋落後一回づゝ、下肥を施します、花の咲く頃土中から取出して、水盤へ取つて根を小石でおさへ、水を二日目位に取かへてやりますと、見事に花が咲きます。

蓮

泥中に咲いても濁りに染まぬといふ、如何にも佛さまの好きさうな花であります、水鉢につくりますには、鉢の中に粘質の土を入れて、その中へ種蓮を植込んで、水を充たして置きます、その肥料に過燐酸石灰がよろしいのであります。

睡蓮(ニンフェア)

蓮を花も葉も小さくしたやうなものでありまして、水鉢の中に涼しく咲きます、五六月頃摺鉢のやうなものに、二分目ほど田土を入れて、厩肥を布き、それに油粕を交ぜ、又田土を入れて種を蒔き、

常に水氣の絶えないやうにし、硝子板で蓋をし、日當りのよい所に置き、發芽して後もよく日に當て、葉が水面一ぱいになつたら、一本づゝ土鉢に移植します、土や肥料の入れ方は同じで、移植後は盥のやうなものに水を入れ、その中に置くのでありますが　水の深さは葉の浮く位にします、そして段々成長すると、大きい鉢に移します、出來がよいとその年に花が咲きます。

布袋草（ウォーター・ヒヤシンス）

葵の如き葉に、薄紫の花の咲く水草であります、根を枯らさずに置けば、株分で殖やすことが出來ます、又四五月頃泥土の中へ種を蒔けば、二三週間で發芽します、その泥土に木灰を混ぜておくとよ

ろしうございます。

金魚草（アンチルヌーム）

金魚の形をして、赤、紫、黄、絞りなどに咲く宿根性の草花であります、春秋の彼岸頃種を蒔き、發芽して鉢又は花壇に移植し、時時薄く肥料を施せば、春蒔は六月頃、秋蒔は翌春花が咲きます、挿木にしてもよくつきます。

姫金魚草（リナーリヤ）

金魚草の花を二三分位大きくした、赤、紫、黄などの混合した美しい花が咲きます、四月頃種を花壇に蒔きつけ、一二回薄い水肥を施します、夏のうちは挿木でどん〳〵繁殖し、日當りのよい乾いた

所を好みます。

百日草（ヂニア）

夏の間百日ばかりも咲きます、八重または一重で、黄・樺・紅・淡紅、白などのいろ〳〵に咲きます、四月頃日當りのよい園地に蒔きつけ、二三寸位芽を出した時引きます。

千日紅

小さい鞠のやうに丸く咲く花で、紅、白などの色があつて、一ケ月以上も咲續きます、丈夫な草花でありますから、無造作に育ちます、されば茲には名を記す位にとめておきます。

美女櫻（ウアーベナ）

櫻と同じやうな花で、色は紅、白、紫、藤色などあつて、中々美しい花であります、夏の花で、一しよに寄せて植ゑますと、殊に見事であります、秋また早春種を床蒔にし、下肥か油粕汁を施し、五六葉出た頃移植し、更に一二回肥料を與へます、春濕氣の多い砂地に株分をしても、又挿木で繁殖させてもよいのであります。

螢草

すみれに似て野生の花でありますが、培養しますと、野生より花も大きく色彩も見事に咲きます、色は普通藍色でありますが、白、淡青色に白の覆輪のもあります、此草は丈夫質で、一度植ゑて置きますと、自然に種がこぼれて、毎年同じ所によく生へます。

鳳仙花（バルサム）

枝のない莖の、葉と葉との間に、間斷なく美しい花をつけます、色は紅、白、絞、紫で八重と一重があります、種は四月頃花壇に蒔きつけ、又は床蒔にして、一二回薄い水肥を與へ、發芽の後他に移植して、花の咲くのを待ちます、花の咲いて居る間は、常に水を絶さぬやうにしてやらねばなりませぬ。

朝顔

朝寢する人には、此花の恩惠を感じる事の薄い、夏の朝早く氣持よく咲く花であります、造花の妙に幾疋をかけて、千態萬狀に咲かせるのは、この花に如くものはなく思はれます、無造作にすれば

蒔放しにして發芽したのを、有合せの立木に絡ませてもよく咲き、よき眺めを與へるものでありますが、葉が無ければ朝顔とはどうしても受取れぬやうな變り花を見ると、それらの丹精は、到底幾經驗を興味に積んだ人でなければ、出來ぬ藝であるとの感に堪へません葉と花に數十種の好みあり、咲く花の動かぬ名を稱へられて居るのもありますが、あまりむづかしい事は專門家に讓り、一通りの作り方を申さば、四月から五月の初め頃迄に種を蒔き、本葉二枚出た頃鉢又は花壇に植ます、土は豫め溝土に砂を交せ、油粕又は下肥などを練合せて、乾固めたのを碎いて肥料にします、本葉五六枚出た時に芽を摘んで枝を出させ、上に伸さぬやうにし、蕾も折々まびい

て、咲く花の勢ひをよくします、また花の盛りは、雨ふらぬ日の午頃毎日水をやらねばなりません、種は終りに近づいて咲いた花のを選び、珍らしい花を咲かせるには、不完全な種を選び、その不完全なのを毎年繼承して試みます、少し興味をもつて、その成育に注意しますと、いつか朝顔の中から生れたやうに會得されます。

筑波根朝顔（ペッニア）

朝顔に似た花であります、三月頃種を蒔き、芽を出して例の通り花壇や鉢に移植します、夏は十分水をかけて、時々薄い水肥を施します。

夜會草（ムーン、フラワー）

朝顔と同じ花で、色は白と赤とありますが、夕方から咲く、香のよい花であります、つくり方は朝顔と同じであります。

月見草

夏の夜に涼しく咲いて、朝になると萎みます、河原や野原に自然生のものは、皆黄色でありますが、春秋の彼岸頃床蒔に、發芽を待つて、眞土に砂土を混ぜた床地に移植します、春蒔のものは秋、秋蒔のものは翌年初夏に咲きます、繁殖法は取蒔か株分をいたします

芙蓉

純白と淡紅色の二種で、大きく如何にも清げに咲く花であります四月頃種を蒔き、成長の後植出しますが、移植を嫌ひますから、あ

まり動かさぬがよいのであります、早ければその年、晩くとも三年目に咲きます、肥料は彼岸前後に一度、蕾の出る頃一度位、薄い下肥でも油粕汁でもやります、挿木は秋の落葉前に枝を切つて、餘り乾燥しない砂地がよいのであります。

夏の日盛りに、白、紅、黃、紫、絞などに威勢よく咲きます、俗に根なし草といひ、枝を挿して二三日すると根を發生する丈夫な草で、よく繁殖します、日當りのよい、砂混りの乾燥した土地を好みますから、成べく水をかけぬやうにするのがよいのであります。

松葉菊（ポルチユラカ）

松葉牡丹

松葉牡丹の大きくて、翠菊に近い花であります、花は紅、白樺、紫などあります、繁殖法は挿木でも株分でも出來ます、挿木は三四日頃より九月頃迄に行ひます、松葉牡丹のやうな乾燥を好みまして、雨の降る日や水氣の多い時は花が咲きません。

翠菊（アスター）

稚氣を帶びた菊と稱すべきもので、紫、紅、白などいろ〳〵に咲きます、春の彼岸過ぎて種を蒔き、四五葉出た頃水をやり、花の咲く迄に三四回下肥を施します、春の翠菊は、種を秋蒔にします。

天人菊（ガイラルヂヤ）

樺、黃、紅など混合した美しい花であります、八重は春の彼岸

一重は春秋の彼岸に床蒔し、發芽の後移植してから、一二回肥料を施します、霜に負けませんから、冬を凌ぐのは樂であります、多年性のものは春株分をして植ます。

金鷄菊（カリオプシス）

花瓣が黄色で、心が茶色が通例でありますが、黄と紅の交り、又紅色のもあります、二三月頃鉢又は床に種を蒔き、二三寸の苗となつた時に植出すが、初めより園地に直蒔してもよいのであります、一二度水肥を施せば、生育の工合はよろしいのであります、

孔雀草（タゲーテス）

黄または樺などの花が、孔雀の羽を逆さに見るやうに咲きます、

賑やかに植込みますとなか〳〵見事であります、種は四月頃の春蒔に限り、花壇植に適して居ります、一二回稀薄な水肥及下肥を施せば、よく生育して花をつけます。

虞美人草

罌粟に似て小さく可憐の花が、紅、白、紫、または紅に紫の覆輪つきなどの色々に咲きます、秋の彼岸頃鉢または花壇に淺く直蒔にし、發芽するとよい程に間引ます、寒くなれば籾殻又は切藁など覆せて霜除をし、春になればそれを取り、下肥、油粕などを一二回施します。

泊夫藍（クロッカス）

葉は藥用さふらんに似て、白、黃、紫、橙、絞りなどに咲きます秋から冬へかけて球根を深さ二寸位に植込んで置きますと、翌春早く花をつけます、冬霜除をするには及びませんが、三四年は移植をせぬがよいのであります、肥料は下肥を用ひます。

含羞草

合歡の花のやうに、手をふれると葉と葉を合せて眠り、暫らくすると又畫は葉は開いて、夜は眠ります、花は丸い淡紅色で、俳味を帶びて居ります、春の彼岸頃鉢又は床地に種を蒔くとよく發芽します、丈夫な草花で、肥料を施しても、施さぬでもよい位であります。

遊蝶花（パンシー）

窪の瓣に厚みのあるやうな、賑やかな花であります、七八月頃鉢又は床地に蒔き、發芽を待つて他の床へ假植をし、九月に植込みます、花は春咲きます、夏咲くのは春蒔くのであります、肥料は厩肥または油粕などを一二回用ひます。

縷斗菜（コラムバイン）

花が苧環に似て、糸繰草ともいひます、暗紫色の萼片に淡黃色の花をつけますが、近來各種の色のが舶來して居ります、實の入るのを待つて床蒔にし、發芽して三四枚葉が出た頃、丈夫なのを選で移植します、株分も出來ます。

あつもり草

一の谷にでも生へさうな名ではありませんか、山野に自生する淡紅色の奇形の花であります、それを春採取して培養します。

紫蘿蘭花（ストック）

一重咲と八重咲とがあつて、紅、紫、白などの色に咲きます、輕い水扱のよい土地を選んで、一年生は三四月、二年生は八九月、多年生は五六月頃床地に種を蒔き、四五葉出た頃、鉢又は花壇に植出します、多年生のものは挿木にしてよくつきます、肥料はよく腐れた厩肥、油粕などがよろしいのであります。

小町櫻

小町草ともいひ、丈は一尺五寸位で、葉は菜に似て、莖の節のところから粘つたものを分泌し、それに虫がとまると、粘り付いて離れません、蟲に困る花の多い中に、虫を困らせる奇態な花ではありませんか、種は秋の彼岸頃蒔付け、發芽後一寸位に成長した頃、花壇へ植込みますが、丈夫で少しも手數のかゝらぬ花であります。

金蓮花（ナスターチューム）

蓮の花に似た、大きさ一寸位の花で、莖は蔓になります、樺色、黄、紅、絞りなど花も見事に、葉も班入などあります、三月頃床に蒔いても、彼岸頃直蒔してもよいのであります、肥料は春一度下肥を與れば澤山で、瘠地の方が寧ろ此花に適して居ります。

金盞花（カレンデユラ）

春菊に似て美しい花で、黄色、橙黄色の一重と八重とがありまして、秋花が咲きます、春の彼岸頃種を床蒔にして、四月頃植込みます、春咲くのは秋蒔であります、肥料は薄い水肥をやります、

射斗

花も葉も胡蝶花のやうで、柿色の花が燃立つやうに咲きます、蓬磨射斗、姫射斗などいふ種類もあります、強健な花で、原野に自生して居ります、肥料は下肥を一度もやれば十分であります。

向日葵（ヘリアンザス）

茎の高さ四五尺もあつて、七八寸から一尺位な黄色な花が、毎日

太陽のうつる通り、大きな花をぐるぐると廻轉する、氣持のよい花であります、種は四五月頃床地に蒔き、發芽して四五葉つけた所で日當りのよい所へ植替ると、七月頃から花をもちます。

矢車草（センタウレア）

紅、紫、白、黄などのいろ〳〵に、花は矢車のやうに咲きます、盛花などにはよい花であります、種は春も蒔けますが、秋蒔の方がよいやうであります。

旌節花

大きな櫻草が、苣蒿の葉に咲いたやうな花で、種は春の彼岸ごろに蒔きます、根分で繁殖させる方が面倒がありません、株分は二月

の末から三月へかけて行ひます。

紅花（サルヴィヤ）

莖の上に穂のやうになつて、深紅色に咲く美しい花であります、紅花といへど紫にも咲きます、八十八夜前後に種を蒔き、二三寸に成長した時、鉢か花壇に移植します、株分も挿木も出來ます。

曇華（カレナ）

芭蕉に似た小さい葉に、美しい花をつけますから、美人蕉とも云ひます、種は非常に硬いものでありますから、一晝夜位湯に浸すか外皮を小刀で削るかして、春彼岸頃床蒔にし、發芽してから植出し一二回肥料を施せば、秋花をつけます、尤も根を植ゑたものは、五

六月頃花が咲きます、株分も出來ます。

たまきんぱうけ（レナレキュラス）

四月頃から黄、白、紅などの色々に咲き、種類も澤山あります、球根も一日間水に浸し、九月頃より翌年四月頃まで、鉢又は花壇に一寸位の深さに植込み、濕氣のある日當りのよいのを喜びます、肥料は一二回水肥を施し、寒い頃植込むものは霜除をせねばなりません、株分、挿木で繁殖させますが、凋花の後は根を堀上げて貯へておきます。

萩

實に可憐に、然も風韻のある花が咲きます、色々種類があります

が、糸萩が最も賞美されます、繁殖は株分で容易く行はれ、世話の入らぬ植物であります。

桔梗

明智日向守の紋所で、色は紫に限つたやうでありましたが、白の絞り、咲分けなどもありまして、一重または八重に咲きます、株分は秋の彼岸頃して、そのまゝ冬を越しますと、翌秋芽を出して成育します、實生より株分の方が手數がかゝりません。

女郎花

黄色な粟粒のやうな花が、枝の先に簇つて咲く野生の花でありまして、株分にして育てますが、もと〳〵野生の花だけに、少しも正倒

なく安々と育ちます。

藤袴

薄紫の小花、澤山美しく簇つて滲く、匂ひもよい草花であります、これもゝと〳〵野生のものでありますから、株分して正側少く育ちます。

紫苑

小菊に似て紫の色に咲きます、春芽を出す頃株分すれば、年々よく繁殖します、肥料は春一度位施せば澤山であります。

龍膽

竹に似て短い葉に、筒形で末端から五つに裂けた花をつけ、晝間

は開いて夜萎みます。三月頃株分をし、日蔭の所を選んで植ゑます

鷄頭（セロシア）

其字の示す如く、莖の先の鷄頭に似た形の部分を小さな赤き花で咲きつぶします、三四月頃種を床蒔にし、五月頃鉢または花壇に植出し、時々薄い肥料を施こせば、七月頃花が前記の如く咲きます。

雁來紅

鷄頭の葉に似て、その葉のいろ〳〵に染まつて美しいのを愛します、種は春蒔にします、無闇に移植の出來ぬ、弱りやすい草花であります。

秋海棠

花の色は白と紅で、一重か八重に咲く、唐美人にあしらひたいやうな草花であります、種を九月頃に蒔きますと、翌春になつて芽を出して、容易く物になります。

菊

四君子中隨一の草花で、氣韻のいやが上にも高く、然も、千狀萬態に、花いろ〳〵に咲かせ、姿さま〳〵に狂はせ、專門の園藝家が十年苦心して、花一つの咲振に滿足するといふ、咲かせ榮のある花であります、咲終つた莖を根元から刈取り、十二月の末に株を堀出して根元に發生した幼芽のうち、勢ひの強いものを一本づゝ切はな

し、日當りのよい肥えた土地へ假植をし、下肥を十分根に與へ、翌春になつて度々薄い水肥を施し、苗を勢よく育て、四月の末から五月の中頃に、鉢なり花壇なりに植込みます、苗がよくつきましたら根元の廻りを堀つて下肥か油粕を施しますが、肥料は成るべく腐り切つたものがよいのであります、菊は下葉を落さないことゝ、葉に班點をこしらへないのが上手だといひますが、それは肥料に關係がありますから、よく注意すれば上手になれる筈であります、それから昆蟲の發生によく注意して、もし蟲害に蒙つた場合は、除蟲菊などで速に驅除せねばなりません、植込に色の配合、花壇のつくり方などは專門家に任せます。

除蟲菊

その葉が害蟲を恐れしむるのが、菊の如き愛らしき花を見る樂しみの景物になります、種は秋蒔いて、翌春植替へますと、その年に花をつけます、宿根性の草花で、春秋二季に株分が出來ます、肥料は下肥、過燐酸石灰などを澤山施します。

寒菊

人目も草も枯れ果てた冬の庭園に、紅・黃などの花を咲かせ、その風韻を樂しむ花であります、十月頃蕾が小さく發生しました頃枝を二三寸位切つて挿木をしますと、よく育つて花をつけます、

寒牡丹

寒さに草木も氷る折柄、霜除風雅につくつて、中に匂はしくも咲かせますと、冬を暮るゝ眺であります、花は多くは一重で、鴇・紫紅、白など普通の牡丹と同じく、つくり方も變りません、たゞその間寒さに對する同情を、此花の上に注がれたいのであります。

スノードロップス

早春雪のやうに咲く、一重と八重の愛らしい花であり、秋球根を植付け、冬季温室の厄介になると、お誂通りに咲きます。

シクラメレ

櫻草料の草花であります、種は平鉢か箱の中へ蒔つけて、温室内に入れて置きます、發芽して成長しますと、根首が段々大きくなつて來ます、その大きくなつた部分を、土の外へ出して植ゑます、蒔つけてから三年目に花をつけます、肥料は三四回油粕汁を施します

シネラリア

五月頃一重又は八重に、紫、紅、白などのいろ〳〵、菊に似て一しよに簇り咲く花であります、六月頃から九月迄、鉢に種を蒔き、新聞紙をその上に覆ひ、その上に硝子板を載せて、木框の中へ入れ温氣を與へて置けば、一週間ばかりして發芽します、日光を遮り、風通しをよくし、時々水をかけて、三四葉出た頃他へ移植し、成育の後は二週間目位に油粕汁、燐酸肥料の薄めて腐らせたのなどを施します。

トリトーマ

初夏の頃より秋にかけて、あやめのやうな葉に、筒形の小花が簇つて咲きます、それが下の方から上に順に咲いて行きます、赤色に黄なり朱なりを帶びたのが、早く咲くのと晩く咲くのがあります、春株分をして、肥料は開花前に一二回下肥を施します、種は三月頃蒔き、二年目から花をもちます。

イキシア

鳶尾と兄弟分の花で、色も同じやうであります、秋球根を植付けて、冬霜除をしますと、翌年の夏花が咲きます。

ダリーア

菊の洋味のある花で、菊のやうな風韻はありませんが、濃艶なる點に於ては、菊は見すぼらしく感せらるゝ位であります、世界の色のないものはないほどに、色さまざまに、大きな菊花のやうなのもあれば、花瓣が短くて先の尖り氣味なのもあり、筒のやうな花瓣が鞠のやうに並ばつて居るのもあり、亂れて咲くのもあり、狂うて咲くのもあり、取分けて小さいのもあり、驚くほど大きなのもあり、一重も八重もあります、變り種を咲かせるのは實生に限ります、三月頃から五月迄に、霜よけをした木框内に種を蒔いて、三四葉出た頃苗床に移し、根に薄い水肥を施し、三四寸位に伸びて、鉢なり花壇に植出します、種類を保存するには株分にいたしますが、球根の

植込は、日當りのよい處へ並べて少し土を覆ひ、常に濕氣を保たせるやうにし、發芽の後花壇なり畑なりの、日當りのよい所に植出します、併し初め一二日は日光を除けるやうにします、土質は充分肥料をやれば、どんな所でも差支なく、その肥料は人糞でさへなくは何でもよろしいのであります、春挿木接木などすれば、繁植の目的が達しられます。

ロベリア

藍、白、淡青などに咲く、小さい美しい花であります、春種を床蒔にし、發芽してから花壇に植付けます、此草は水分を好みますから、濕氣を持たせて置かゝなりません、秋は莖ごと種を收め、よく乾かして貯へて置きます。

ミムラス

黄白などの班入で、金魚草のやうに釣鐘形の花が咲きます、種の小さいものでありますから、蒔きつけて土を覆ふに及びません、春蒔と秋蒔とありますが、秋に蒔くと霜除の手數がかゝります、夏は挿木をして繁殖することが出來ます。

ヂキダリス

大きい葉に釣鐘のやうな美しい花が、黄、紫、紅、白、絞りなどのいろ〳〵に咲きます、種は秋の彼岸前後に蒔き、時々下肥、油粕汁などを施し、翌年移植しますと、蒔付けてから二年目に花が咲き

ます、それから株分をして繁殖します。

コスモス

花は桃色、紅、白などの六瓣内外の花で、糸のやうな葉をつけて丈高くのびた枝々の先に咲きます、無邪氣な花で、澤山植込みますとなか〳〵奇麗であります、春の彼岸過から五月頃迄種を床蒔にし三四寸になつてから植出します、又直蒔にしてもよいのであります、肥料は咲く前に一二回下肥をやります、心を摘んでやれば、枝も多くなり、隨つて花の數も多く咲きます、挿木をしてよく繁殖します。

ヒヤシンス

種類が極めて澤山で、色見本となるほどのいろ〳〵に咲きます、十月頃日當りのよい床地に、球根を三寸ばかりの深さに植込み、その上を藁、落葉などで覆ひ、薄い水肥を施しますと、翌春二三月頃花が咲きます、培養上注意せねばならぬことは、發芽しないうちは成るべく日光に當てぬやうにすることであります。

アネモネ

色は紅、白、紫、藍、空色、絞りなどで、花は菊に似たものと、罌粟に似たものとかあつて、いづれも愛らしく咲きます、九月頃より翌年五月頃までに球根を日當りのよい花壇に、二寸位の深さに植込み、二三回水肥を與へます、冬は霜よけをせねばなりません、花

の咲いた後は球根を堀上げ、よく乾かして置きます、株分も挿木も出來ます。

シレネ

初夏の頃櫻の花に似て、櫻色と白の二色に咲きます、一年生は四五月秋蒔にします。

フリージア

春三四月頃、圓筒狀の花が穗のやうに咲きます、色は白と紅とがあつて、よく香を持つて居ります、十月頃球根を一寸ばかりの深さに植ゑ、霜よけをし、肥料は油粕汁を施します、鉢植にするには、一寸位の深さに球根を植込んで、適當の濕氣を保たせ、日蔭におい

て發芽させます、發芽すると日光にあて、心を摘んで花の發育を助けます、肥料は開花前一二度用ひます。

チューリップ

花は一重と八重とあつて、黃、紫、紅、白、緋などの色々に、極めて艶麗に咲く、春の草花の名品であります、十月頃球根を目當りのよい花壇に二三寸の深さに植ゑ、藁か木の葉のやうなものを霜除にします、肥料は春一度薄い水肥を與へ、水をかける必要はありません、そして蕾が出た時に油粕の汁を一度施します。

トレニア

八月頃から秋へかけて咲く、奇形紫色の花あります、水さへ

やれば丈夫に育つ花で、春三月の末種を蒔き、小さき種ゆゑ土をかぶせずに置きます、二三葉出た頃他の鉢なり箱なりに移し、それから一ケ月ばかりして、一本づゝ花壇に植出し、一二回薄い肥料をやります。

アマリリス

蘭に似た草花であります、春の初めの日當りのよい地の、油粕など施してよく肥えた土に淺く植込み、時々球根にかゝらぬやう水をかけ、發芽してから油粕汁を施します、夏は日光を避け、冬は木框の中に霜をよけます、鉢にまばらに蒔いた上に、葉など振かけて置きますと、秋までには二寸位の球根をつけます、三四年經ちて花が

咲きます。

アマリリス

蘭に似た草花であります、春の初めの日當りのよい地の、油粕など施して、よく肥えた土に淺く植込み、時々球根にかゝらぬやう水をかけ、發芽してから油粕汁を施します、夏は日光をよけ、冬は木框の中に霜を避けます、種を蒔くのは五月頃で、鉢にまばらに蒔いた上に、葉など振かけて置きますと、秋までには二寸位の球根をつけます、三四年經つて花が咲きます、

マーガレット

白く菊のやうに咲く花が、作り方は除蟲菊のやうに、極めて容易

であります、種は春蒔きますが、挿木でもよくつきます。

アルテナンセーラ

濃紅・赤・黄・薄黄などの葉があつて、雁來紅のやうに葉を見るのであります。冷氣が加はるに隨つてその色を増し、十月頃殊に其美を發揮します、その癖寒さには弱い花で、越年は温床の厄介になります、繁殖は春から秋にかけて絶えず出來、非常によくつきます

アルメリヤ

針のやうな短い葉から、一二寸位の花梗に櫻色の小さい花が、鞠のやうに簇つて咲きます、温かな土地では年中咲く花で、一ケ所に長く置くと枯れますから、時々植ゑかへます、株分は春から秋まで

續いて出來て、冬も霜除するには及びません。

ベコニヤ

秋海棠に似た花で、種類は三四百の多きを數へることが出來ます色は白、紅、赤、黄、橙黄などさまざまあつて、八重と一重に咲きます、風霜に逢うても良の褪めない元氣のよい花でありますから、手入も左まで面倒をかけません、種は極小さいものでありますから淺い皿に輕い砂を盛つて、濕氣を保たせた中に蒔き、硝子板を上に載せ、六十度内外の温度を保たせて置き、發芽して苗の取扱ひが出來るやうになつて、一本つゝ植ゑかへます、又株分は腐土に砂を交せて入れた鉢の中に植込み、水の世話を行届かし、丈夫に育つてか

ら花壇へ移します。

レナンキユラス

虞美人草や罌粟に似た花で、黄、白、紅などの色に咲き、種類もいろ〳〵あります、落花後堀出して貯へた球根を、秋花壇又は鉢に植込みます。花壇のは霜よけをし、鉢のは温室に入れて寒氣を防きます。

グロキンニア

初夏の頃白地に赤、青、紅、桃色などの色を染め、五六枚發生する大きな葉の中から、拔出した花梗に筒形の花をつけます、種は春の彼岸頃、排水のよい床地か、鉢に蒔き、種の隱れるを度として細

き砂を篩ひかけます、此草花は温室を好みます、土は藁灰を混ぜるとこの花に適します、挿木でも葉挿でも繁殖が出來ます。

ハルシヤギク

夏日切花によく用ひる、金鷄草の葉に似て、黄褐色の花をつけます、種は春季二季に咲いて、發芽の後花壇に移植します。

ホクシア

蕾の頃は瓢のやうで、それが開くと花蕊が外へ出る、頗る奇形の花で、四月頃から秋へかけて咲きます、春の彼岸頃芽を摘んで挿木をしますと、よくつきます、冬は温室に入れてやらねばなりません、一度でも霜にあてると枯れます。

フロックス

なでしこに似て、夏日赤、白、紫、覆輪などの色に咲きます、春床地に種を蒔き、一二寸に成長しますと芽を摘取り、枝を多く出させるやうにし、一二度下肥、油粕汁の薄めたのをやりますと、大きく美しく咲きます、六七月頃砂勝の床地に幼梢を挿して、相當の濕氣を與へますと、よい苗を得られます。

プリムラ

櫻草に似て、一重と八重があり、手入さへよければ年中咲いて居りますが、普通秋から冬にかけて咲きます、種は成熟するのを待つて鉢に蒔き、薄く土を篩ひかけて、直に日光のさゝぬ暖かい所に置

き、時々に小き如露の水をやり、發芽してから日光にあて、二三葉出てから移植します、一重のものは種がありませんから挿木にするより外はありません。

ヘリアンサス

葉も花も向日葵に似て小さい草花であります、黄金色の花瓣に樺色の蕋をうつりよくつけて居ります、中々秤類の多い草花であります、種は春秋の彼岸頃露地へ蒔き、二三寸に成長するを待つて移植します、秋蒔は霜よけの手數はかゝりますが、翌夏早く咲いて、秋までよい姿を見せます、肥料は油粕、下肥などを用ひます。

ニジエラ

七八月頃盃の形した花が咲きます、色は白、紫、黄に青などもあります。種は春彼岸頃床蒔にし、二寸ばかりに生育をするのを待ち花壇に植ゑます、肥料は花の咲く前に二三度油粕汁をやります。

ヘリオトロープ

夏から秋へかけて、紫の漏斗の形をした花が簇つて咲き、極めて品種の多い草花でありまして、いづれもよい匂ひがあります、種は春木框の内に蒔きますが、春秋二季ともに挿木をしてよくつきます冬は温かにしてやりたいものであります。

ペレトステモン

夏から秋へかけて花梗を拔出して、暗紅、紫紅、朱紅、淡紅などの色した穂の形の花をつけます、水はきのよい土地ならばよく育ちます、挿木は冬の外いつでも出來ますが、秋は殊によいので、多く秋にするやうであります、

カリオフンス

一重又は八重に賑やかに咲く、菊の形した小さな花であります、一年草のものは春種を下し、宿根草のものは秋に、いづれも彼岸前後に種を蒔きます、株分をするには春に限ります。

ランタナ

夏より秋にかけて、花梗を拔出した漏斗なりの花が、傘のやうになつて咲きます、隨分種類がありまして、色は橙紅、黄、白などあ

りまして、花のさく時季に挿木をし、濕氣を常に保たせて、冬を温くして越し、春になつて水の量を増してかけます。

切花の水揚

草花は切つて瓶中に樂む場合が多くありますが、すべて草花を切るには、太陽の上る前が一番よく、夕刻もさし支ありません、日中に切れば兎角するほどに萎み、雨降る日に切れば、水を揚げても長く保ちません、切花は切口を熱湯の中へ一分ばかり入れるか、アルコールと水とを半分位づゝ混合して、それを一寸切口に浸すか、鹽酸の薄くした液へ切口を浸けますか、花瓶の中へ食鹽又は砂糖を澤山入れて置きますとかすると、よく水を揚げるものであります、

栽培に關係ないことでありますが、記して置きます。

一四　木花の育て方

木花は草花と違つて、其幹枝が丈夫でありますから、其培養も草花のやうに際どくなく、細かしい世話も入りません、大抵植放しにして、花の約束は多く背かれぬのでありますから、たゞ些しの注意を加へたに過ぎないのであります、藤がこの木花の部に編入され、草花の中に牡丹などのあるのは、分類の多き煩を避けて、打見た目を標準にしたのであります。

梅

春に魁けて咲き、其風姿の清らかなのと、其香氣の得ならぬのとで、風流韻士に愛好せられて居ります、紅白の花に一重と八重とがありまして、其品種も極めて多く、この花を歌はるゝ名所も少くはありません、實生を挿木、接木などで繁殖せますが、實蒔きからではなか〳〵花の咲く迄が待遠き爲、切接、割接、呼接などいたします、臺木には實生の苗が二三年經つたのをつかひます、盆栽にするには、其接いだのを翌年になつて移し、挿木は三年目に移します時期は三月か九月がよいのであります、肥料を好む花卉であります から、眞土に肥土を交ぜた所へ植込みます、梅の鉢植は至極むづかしいものでありまして、澤山花をつけやうと思へは、時々植替えて

小根を切取り、枝も花が咲終つたならば、芽を二三個殘して切つてしまひます、そして素燒の瓶かなんぞに植替えて、充分肥料を施し土中に埋めて置き、蕾をつけるやうになつて、好みの鉢にとります

椿

桃色、白、絞りに黃などもあつて、鷹揚に咲く花であります、盆栽家はいろ〳〵の名をつけて、變つた花の咲くのを喜んで居ります繁殖は接木が一番で、それから挿木、實生のは決してよい花をつけません、接木は呼接が最も簡易で、挿木は枝を切取つて一晝夜位水に浸け、下の方の皮を削つて挿します、肥料は油粕を寒中に施すのが、中々きゝ目があります。

桃

その桃色と、白又緋などの色に咲き、梅、櫻の中間に其嬌姿を愛せられ、雛の節句にふさはしく飾らるゝ花であります、桃栗三年と唄にもうたはるゝ如く、實蒔にしても早く花をつけますが、接木の方が一層早く其繁殖を見る事が出來る譯であります、この花一度實を結んだ枝には咲かぬものでありますから、よく枝切を行うて、新梢の出たのに、次年の花を待つやうにせねばなりません、接木は早春行ひ、肥料は過燐酸石灰、油粕、下肥などを少し施します。

櫻

たゞ花とさへいへば、櫻と解して差支へないのであります、櫻

は花の總名代として、至る所此花あるが故に春は賑ひ、人の心を長閑にして居ります、我國では鹿兒島地方から咲初め、順次に東に北に及び、三月から咲く花が、北海道では六月に咲きます、六月の春もないものでありますが、北海道では此氣候を春と見てよろしい譯であります、種類も澤山ありまして、熊谷櫻、黑染櫻、五色櫻など品種が二三百種もあり、一重に八重にさま〳〵に咲きますが、雨によし、月によし、風にチラ〳〵散るのも、なか〳〵風情のあるものであります、種を蒔いて繁殖させることは面倒でありますから、接木か挿木をするのがよろしいのであります、されば實生は接木の臺木に仕立てる位のもので、盆栽などは接木でないと花が咲きません

種は櫻の實の熟するのを待つて、その實をとつてすぐに蒔き、發芽してから下肥をやりますと、二年目には大きくなりますから、それから移植します、そして三年目になつて接木の臺になります、挿木は春枝を切つて挿しますと、容易くつきます、移植は秋から春へかけてしますが、花をよく咲かせるには、十月頃かよいのであります

木爪

紅また白の二色ありまして、なか〳〵賑やかに咲く花であります若い枝には刺がありますので、これなくばと思はれます、肥料は寒中根の廻りに下肥を施します、接木は二三月頃行ひ、挿木も無論出來ます、風姿のよい枝ぶりが多いので、盆栽には至極おもしろ味があります。

木蓮

紫の花の咲く紫木蓮といふのと、白き花の玉蘭といふのがあります、丈高き樹姿には風韻があり、花は大きくて然も優美であります實生が挿木で繁殖させますが、肥料は花の開く前下肥を施します、土質も好嫌ひのないのと、少しも乾燥を恐れませんから、栽培も少しも造作ありません、

海棠

この花は雨中に咲くのに人氣があつて、これを涙もつ美人にたとへて居ります、一重と八重とがあつて、盛んに花をつけます、繁殖

は實生で花を見るのは八九年の月日を經ねばなりませんので、梨や木瓜などを臺木にして接木にします。肥料は寒中に根の廻りへ下肥を施します。

藤

春より夏へ咲きかゝる花で、藤の色美しく蔓長く垂れて咲くのが高き木に這ひかゝつた蔓からのや、池の上にしつらへた棚から下つたのやが、なか〳〵風情があるので、この花の名所が澤山あります毎年春早く肥料を施し、花が咲きますと、色の褪めぬうちに早く切つてしまひ、新たに出た枝を、たくて節の短かいものだけを殘して切りますと、來年の花を多く樂しまれます。

薔薇

薔薇の多くは四季に咲き、白い花が通例でありますが、近來はいかなる色のもあつて、その色の嗜好に其人の趣味を上下せらるゝ位であります、其品種の多いこと實に驚くばかりであります、この花は肥料を好みますから、下肥、油粕などを薄くして、時々其根へかけてやります、氣をつけて古い無駄な枝を剪つて、強さうな芽を育てゝ、新らしき枝をつくるやうに、花もかたまつてつけた莟をよい程に間引いて、大きく咲くやうにしてやります、そこで時々枝をかつてやること、有あまる莟をまびくこと、咲きつかれた花をとる、時々水をかけてやること、たまには肥料をやること、これ等の

手入に氣をつけてやらねばなりません、繁殖は接木か挿木によりますが、接木は野薔薇を臺木にして接ぐと、至極よろしいのであります。

石楠花

躑躅に似た花で、澤山深山幽谷に自生して居ります、色は白と薄紅の二種でありましたが、近時各種の色のが舶來しました、植付は春が一番よく、肥料は米洗汁を時々施せば、濕氣を保たせるものとの兩得があります、盆栽に仕立てるには、挾挿にするのがよいやうであります。

柘榴

これ亦風流な花で、赤と白との二種に咲きますが、純白なのが殊に韻致があります、繁殖は實生、取木、挿木、接木などによくしますが、盆栽には取木が面白いやうであります、肥料は油粕のよく腐つたのを薄めて、月一回位やるやうにします。

木犀

枝の先に黃又白の小さな花が簇つて咲く、極めて香の高い花でありまして、花の盛りは四五丁をかけてよく匂ひます、黃色のを金木犀といひ、白色のを銀木犀といひます、繁殖は挿木が一番よろしいので、五六月粘り氣のある土に挿すとよくつきます、肥料は下肥を寒中根の廻りへ施します。

いど

七八月頃五瓣位で白色に咲く花で、近山にて寄易に其種を求められます、稀薄な油粕汁をよく施すと、めき〳〵成長して早く花の咲くのが見られます。

合歡花

其の葉の眠氣を催し顔なのと、穂のやうに垂れてしほらしく花が咲いて居るのが、なか〳〵風流であります、これも油粕汁を肥料に好みますから、時々かけてやります。

山茶花

白又は紅に咲いて、花珍らしい各季に少なからず景氣を添へます

繁殖は實生、挿木、接木などによりますが、實生は臺木をつゝる時にのみ多く用ひられます、挿木は六七月頃挿して、毎日水をやつて居ると、いつの間にかつきます、接木は春秋二季に呼接などするのがよろしうございます、植替は春の彼岸から梅雨迄で、肥料は例によつて寒中下肥を根の廻りにかけてやります。

茶

山茶花に厚みのある梅の花を咲かせたやうな、白く締つた、俳味を帶びた花が咲きます、繁殖は實生によります、肥料は年に三度位油粕汁を薄めてやります、植替は春または秋の彼岸頃がよろしうございます。

黄色な五瓣の花の咲く、蔓性のものであります、挿木又は接木をしても容易くつきます、移植は春の彼岸前後がよろしいのであります、培養法は梅と同じことであります。

黄　梅

一五　花卉の培養に就て

花卉の栽培法に就ては、甚だ不完全でありますが、以上述べましたところで、經驗を重ぬる基礎にはなるであらうと思ひます、そこで花卉栽培に就て、いさゝか感じたること、また參考ともなるべきことを、二つ三つつけ加へたいと思ひます。

花壇と花の色

物の色は花に現はれて、その花の色を記述するには、この一冊子を要する譯でありますが、その多數の色は之を青、赤、黄の三原色に分解することの出來るのは、皆さん御存じの雜誌の口繪などにある三色版が事實の上によく説明して居ります、以上の三色が原色となつて、此三色のうち赤と黄を混ぜると橙色になり、黄と青とを混ぜると緑色になり、赤と青を混ぜると紫色となり、この色々を押ひろめると、自然の色のいづれにでも到着します、この原色と最も近き合色とを、冷温の二度に區別しますと、紫、青、緑の三色冷色で、赤、黄、橙の三色は温色でありまして、太陽の光がその作用を

示します、花壇をつくるには、この色の配合が大切でありますから咲く花の冷温をよく識別して、目にうつる感じをよくするやうにせねばなりません。

花卉の一年

數限りなき花卉を、閑人に多くの土地を與ふれば知らぬこと、少しの空地と少しの時間を使ふ位では、中々見ひもよらぬことで、その小空地と小時間を經濟的に使ふことが肝腎で、たとへば春は福壽草から振出して櫻草、ヴアイオレット、牡丹、夏は燕子花、石竹、朝顔、ダリヤ、カーネーション、秋は孔雀草、コスモス、雁來紅、菊、冬は寒牡丹、オキザリス、プリムラ、フリージヤといふ工合に

四時花を絶さぬやうにし、昨年は彼を試みたれば、今年はこれを試みるとか、今年の失敗は來年恢復して見やうとか、昨年の經驗に今年は趾をかけて見やうとかいふ風にして、この間に庭には蔬菜を、室内には盆栽を一つ二つにても參加せしむると、更に興味の深きを覺えます、一たびこの興味の人となりますと、終身飽くことなく、家庭を清新に導いて行きます。

買つた花と育てた花

都會にて身分も輕き世帶の持ちたては、緣日をひやかして先づ買つて歸るのが草花であります、即ち希望にみち〳〵た人が、草花の一つも飾つて見たい氣分になつた譯であります、その四五日は草花

も珍らしく取扱はれますが、段々冷淡になつて參ります、多寡が何錢か何十錢で買つた位に思はれるのであります、それが自分で育てた花でありますと、飽くなどゝいふこともなければ、隨つて花の生命も長く保たれます、買つた花は所謂路傍の花で、すぐ顧られなくなり、自分で育てた花は家庭の花で、實になる末まで樂しまるゝ譯であります。

花卉の名品

造化の妙を更に擴張して、花卉の自然に作意を加ふるやうになり隨つて廣く愛翫さるゝ花卉ほど、其種類に多きを加へ、品名が續出するやうになり、その名稱をも付けられるのでありますが、もとこの名稱たるや狹き專門家の範圍にのみ唱へらるゝものでありまして

それ等を研究するは亦專門家の事でありますが、されどその二三例を記し、趣味向上の結果珍種をつくり、自らその名を與へて樂しむこともあることゝ思ひます、その參考までに記して置きます。

▽福壽草　車屋白(白)秩父紅(赤)長島(黃色千重)撫子咲(切咲)等

▽梅　重寒紅(白八重)鶯宿梅(帶黃白八重)輪違(紅白絞り八重)緋の司(濃紅八重枝垂)高砂(白一重枝垂)等

▽櫻草　敷島(鴇色に紅絞り)襤褸錦(桃色)代々の譽(藤色)香爐峰(白狂ひ咲)青葉の笛(青地絞り)等。

▽牡丹　富士峰(白千重大輪)西行(櫻色千重大輪)銀覆輪(藤

色白ぼかし）花大臣（若紫萬重）墨流し（黑紫に白絞り）

▽櫻　欝金櫻（薄黃八重）糸括り（淡紅八重）楊貴妃（紅千重）天の川（紅八重大輪）等

▽芍藥　千歲錦（白に紅絞り萬重）群芳錦（紅地に白と青の絞り千重）濃神樂（濃紅手鞠咲）等。

▽夏菊　黃金の簑（黃八重大輪）夏の雲（白八重大輪）八重獅子（紅萬重）夏の月（白小輪）等。

▽薔薇　仙齡（白八重かゝり大輪）金剛（黃八重抱へ咲）金盃（黃金色八重大輪）櫻鏡（薄紅八重大輪）等。

▽藤　白野田（長穗の白）紫野田（同紫）白玉（白）紫玉藤（紫）紅岩藤

（紫紅）等。

▽花菖蒲　龍田川（紅地に白筋）醉美人（白地に紫絞り）白牡丹（白の牡丹咲）揚貴妃（紅紫に白がすり）太平樂（淡海老色）等。

▽花菖蒲　今紫（本紫）白龍（白に紫絞り）津田紅（濃紫）矢車（純白）紫雲龍濃紫大輪）等。

▽柘榴　東明（黃色の芽、鴇色の花）源平（紅白の咲分千重）八重襷（樺八重）等。

▽朝顏　平咲、糸咲、亂れ咲、亂獅子、六曜咲、桔梗咲、抱へ咲風鈴咲、蜻蛉咲（以上花）打込葉、八手葉、龍田葉、芙蓉葉、蔦葉、桐葉、蔦葉、孔雀葉、抱へ葉（以上葉）等。

▽菊　月の雁（純白大輪）淵明錦（外黄、内紅）雛ケ島（黄萬重）六韜三略（濃紫萬重）世界之圖（紫萬重一文字咲）雪の白濱（白太管千重）湖水（黄太管一重）水山吹（黄しだれ咲）菊水（白の糸咲）吉野山（淡紅丁字咲）等。

▽椿　荒獅子（緋八重）岩根絞り（紅地に白絞り八重）太神樂（紅八重）都鳥（白八重）羽衣（櫻色一重大輪）等。

▽寒菊　花の錦（紅八重　多賀峰（純白）雪嵐（白一重）司紅（紅八重）紅雀（紅千重）等。

▽ヴアイオレット　スワンホワイト（紫赤一重）バリエゲーテット　シングル（濃紫八重）等

▽フロックス　アルビヨン（菫色の白縁）プレジデント、クラント（藤色に白絞り）キング、オブ、ホワイト（白）等。

▽チユーリツプ　ホワイト、ビシオン（白一重大輪）ビユリチー（白八重）ミユリロー（白に桃ぼかし八重）カーミン、ブリアント（濃紅一重）クロシーハド（櫻色八重）クリソロラ（黄一重）等。

▽ヒヤシンス　グランド、ペインキユール（白大輪）モレノー（桃色大輪）グルート、ポルスト（紅八重）キング、オブ、ゼ、ブルース（紫大輪）プリンス、テルパート（黒八重）ブロックス、ベルグ（淡黄八重）ッド、ドラコン（緋白絞り大輪）等。

▽アネモネ　ロセッテ（白に桃色縁八重）バイオラタ（菫色大輪）レ

▽レナンキユラス　ローマノ（緋大輪）グランヂフロウ（紅黃絞り）ブライヅメート（白八重）キング、オブ、ゼ、ネザーランド（黑八重大輪）ジャーネ、スーペルメ（黃八重）等。

▽カーネーション　キング、オスカー（紅大輪）ゼンマ（同樺）ネーハグイネ（同白）ボールドウイン（同桃色）マンギー、ホグソン（同緋）ヲールド、ブラッシ（桃色ぼかし）等。

▽ダリーア　アクム（紅地に海老茶ぼかし）ウラナス（白地の紅絞り）コレウテー（白大輪）スノー、クイン（白萬重）エレフエア（白大輪）メルペイユ（紅紫細瓣）アリス、ルーズベルト（紫ぼかし）マダム、フエラード（白に紅ぼかし）等。

▽スウキートピー　ゲーチー（白の紅絞り）モンブラン（白大輪）ネピー、ブリユー（空色）ミセス、エクホート（黃大輪）等。

▽ペコニヤ　カーミナタ（紅の房咲）マクラタ（白の房咲）ブレシジデント、カーノー（桃色大輪）サンギネア（白）等。

▽カンナ　イースター、ヒユチー（樺大輪）メフイスト（黑紅色大輪）モンブラン（白）ミセス、アルフレッド、エフ、コナート（深紅大輪）ドクトル、ナンセン（純黃大輪）フエポライト、ジヤンプ（紅大輪）等。

▽ゼラニユーム　ロ！ザリント（紅八重大輪）パラダイス（紅八重狂ひ咲）ニウ、シルバー、クイン（白八重大輪）メントモア（紅一重

大輪）マダム、クロース（桃色八重）等。

▽プリムラ　モンブラント（白大輪）ラ、ヴァイオレット（帶紫紅）ロイデスオレンジ（樺大輪）ルブラ（櫻色八重）アルバ、ブラ（白八重）等であります。

一六　觀賞蔬菜の育て方

家庭に於ける園藝は、娯樂が主となるべきものでありまして、蔬菜の栽培の如きは、あまり好ましくはありません、去ながらその蔬菜のうちに、花卉の如き美感は與へませんが、刀豆の如き風韻のある花の咲くのもあり、山葵の葉の俳味を帶ひて生へるのもあり、胡

瓜の如くブラリと下りたるに、捨がたき野趣があるのもありまして狹き庭ながらその一莖、その一本を試みて、寧ろ甚だ不作なのに、興味を感ずるものがないでもありません、されば二三十種こゝに推薦したいと思ひます、蔔蘿・胡蘿蔔・午蒡などのこの撰に洩れたのは、同情に堪へません、併し菜の花の咲く頃、その一株を庭園に迎へるなどは、甚だ歡こばしい事であります、又肥料は人に於ける食物の如きもので、食はぬ爲に死んだ話はきゝませぬが、食過ぎて死ぬる人は少くないやうであります、花卉に對して肥料は大切であるに違ひありませんが、無闇に施しては却つて害になります、まして食味より觀賞を目的とするに於ては、猶更のことであります。

土筆

土筆の萠出たのは、其雅致のあるものであります、春の日やうやう温かくなりますと、至る所の原野堤塘に自生して居りますが、我庭にもその風情を移したく思はれぬでもありません、これは野生の根を掘取つて、ぽか〳〵と軟かく、よく肥えた、成らば小高い所に畦を立てゝ植ゑますと、夏になると根はひろがりまして、翌春お誂ひの如く筆の形して生へます、肥料にも及びません、過燐酸石灰の少しでも施しますと申分ありません。

花菜

甘藍の葉で棕梠の實の如きものを含んだ野菜で、その包まれて咲

いた花は、ザッと湯を通して三杯酢にすれば、頗る風味のよいものであります、種は春秋二季、九月か三月頃に蒔き、同じ土質の畠に幾回か植替えると、其葉組が密になります。

芹

ちよろ〳〵水の流れる所、芹は盛んに自生します、もし庭の一部に水氣の絶えぬ所があれば、移植して繁殖するに任せ、其一莖を御馳走のツマに用うるも妙でありませんか、これは實用的に良栽培法が出來て居りますが、家庭の園藝として、それ程重きを措くには及びません。

石刀柏

獨活に似た宿根草で、莖に互生する枝がありまして、枝に松葉の如き細線の葉をつけて居るので、松葉獨活ともいひます、それに黄綠色の花が咲き、小豆のやうな實を結びますのが、鉢にしてやりたいやうにも思はれます、三月頃成熟した種を蒔き、五分か一寸位土を覆ひ、發芽するのを待つて、あたりの草を取つてやるなどの手入例の如くして、秋になると折角出た葉莖を土際から刈取つて、その刈取つた葉莖や堆肥などをかぶせて、めでたく寒さを凌いで春になりますと、移植して三週間に一度腐土などをかけてやります、それから秋になつて、前年の如く葉莖を切り、堆肥をやり、土寄をして、三年目の春を迎へて、漸く目的を達するのであります、私はこの三年に跨る丹精が、生育狀態に興味があつて、園藝に利する所少なからざる經驗を得られるやうに思ひます。

豌豆

蠶豆と違うて、白に紫に咲く花に優美な所があります、温暖な地で、多少の濕氣さへあれば、大抵容易に成育します、種は十月頃蒔きまして、發芽の後一回水肥を施し、蔓が延びますと竹などで支柱を立て、それに這はします、肥料は過燐酸石灰か藁灰などを言譯位にやりますと、冬の冷氣など知らぬ顔して、春の花珍らしい時に、美しく咲き、その實も育ちて翫賞されます、

蕗

これがまた傘のやうに葉を擴げて、秋田地方では雨を凌げるほどのが出來るとの事であります、その一莖一傘を庭に移すも面白いではありませんか、蕗は冷氣を好むものでありますから、日蔭によく成長します、莖の色に白と赤とがあつて、風味は白莖の方がよろしうございますが、翫賞を兼ねるので、赤いのも捨てたものではありません、豫め作つた畑地に五月頃根際に生ずる芽から、勢ひのよさゝうなのを撰んで植込みます、肥料は下肥を施しますが、栽培してまた落付かぬうちにやりますと、却つて枯れてしまひます。

苺

見るから甘美の味を有てるやうな實の、赤く生つて居ますのが甚だ愛らしく感じられます、九月頃その時分に發生した新しい株を淺く畑地に植込んで、翌年芽を出す前に肥料を施し、それから折々水肥をやりますと、五月頃から花が開き、つゞいて顆を結びます。花が咲き初めると、葉を短かく切つて、根の側に敷きつめ、低く結ぶ顆の汚れぬやうにしてやります、土質は眞土か、それに砂土の交つたのがよいのであります。

蓼

蓼食ふ虫もすきゝといひますが、そは味の話で、その辛さうな葉に赤點々の粉をつけた實が、一寸ひねつて居ります、濕氣のある有機質の多い地、下水や溝に近い所がよく育ちます、三四月頃種を

蒔き、水肥をやりますと、晩冬から翌春にかけて嫩芽が出て、いつか物になります。

茗荷

笹のやうな葉をつけたのが、勢ひよく春から夏へかけて、ノソリと生へる筍のやうな形した子が出來る、一寸風情があります、繁殖は株分にしますが、四月頃地下にある莖を六七寸の長さに切り、一株に一つ宛の芽をつけ、豫め耕した畑地に植込みます、見た通りの強健な性を有つて居りますので、寒い暑いも平氣で居るばかりでなく、他の仲間の嫌なやうな日當りのわるい所でも、呑氣に育ちます肥料は堆肥または落葉などを冬期にかけて置いて、自然に腐らせて

行きます。

薑

これは茗荷の兄弟分で、茗荷の子を見るやうな風情はありませんが、その或物は氣持よく、その或物は意地のわるい辛味をもつた根を聯想して、茗荷同樣庭の一隅を割愛したく思ひます、四五月の頃種を蒔いて、一ケ月ばかりすると發芽しますから、畦の間に刈草などを敷いてやりますと、九月の末には、根が物の用に立ちます、土質は粘り氣があつて肥えた所がよく、肥料は下肥油粕などがよろしうございます。

八つ頭

莖が盛んにのびて、葉をつけ、その葉に露をころばすところなどは、威勢のよい涼味のあるもので、その莖が鐵砲に似て居る所から軍國的蔬菜ともいひたげな風姿であります、眞土に砂まじりの地か粘り氣のある土質を撰びます、四月に入ると種を蒔いて、約一月ばかりしますと發芽しますから、下肥を施し、土寄せをしてやります と、九月頃には料理されるやうになります、此作物は枯れぬやうに時々水をやり、水肥も一二回はやつて、發芽からが、われ〳〵の翫賞に値するやうになるのであります。

茄子

紫の色の花、濃紫色の顆、鉢に栽えて翫賞したく思はれます、熱

帶地方では越年して灌木のやうになり、累々と顆をつけますが、本邦では一年草で、然も去年の畑地を嫌ふなどは、少し贅澤であります、土質は砂土まじりの眞土を、よく肥して粘り氣を持たすとよろしく、肥料は稀薄な水肥を時々やります、すると五月上旬に蒔いた種が、七月頃花をつけ、顆をならせます。

西瓜

瓜の王で、少し大袈裟なものでありますが、この大きなのを丹精して、もしそれが食料にでもなれば一しほのお慰みであります、土質は砂まじりの眞土、又は砂地に栽えたのは、外觀はよろしくありませんが、風味はなか〳〵結構であります、また粘土に栽えたのは

大きくて見事でありますが、風味は少し下るやうであります、家庭へ歡迎するのは、その風味より外觀の方を撰びたいと思ひます、砂地を好む位でありますから、旱魃は平氣でありますが、雨の多い年は不作であります、四月頃種を蒔き、土をかけた上に、籾殼や切藁のやうなものをかぶせて、本葉四五枚出た頃心を摘んでやります

甜瓜

西瓜の成熟は花が落ちて後四十日位が通例であります、肥料は下肥干鰯、過燐酸石灰、藁灰などをやります　それから西瓜は同じ場所に育つのを嫌ひますから、年々畑をかへてやらねばなりません。

食品として不消化ではあれど、其味甘美な爲に、一部の嗜好者があると共に、その實り振も亦愛翫せらるゝ譯であります、直蒔が手數を省く故に、やゝ高くしへらへた畑地に、四月頃種を蒔き、土をかけ、それに切藁や籾殼のやうなものを置いて、發芽するのを待ちます、本葉三枚出ますと、すぐに心を摘んでやり、枝が二つ出ますが、その枝にまた葉を五六枚つけた頃、心をつんで、その枝から四五本づゝの枝が出るやうにしてやります、それから花が咲き、實を結ぶ事になりますが、心を摘む度に、水肥をやることを忘れぬやうにしたいものであります。

胡瓜

黃色な花が咲く、茶氣のある瓜がブラリと下る、これを庭の都合

で二三株作つて見るも、興がないではありません、三月中種を蒔くのが通例で、三枚の本葉が出ると、畑地に然るべき空間を置いて植込み、兩三日日覆をして水を施し、それから二週間目位に水肥をやり、苗が一尺近くも成育しますと、竹で支柱をこしらへてやります瓜が生れば節成種以外のものを心を摘んでやります、肥料は晴天の夕刻に汚水をやります。

蔓　茄　枝

小さく愛らしい黄色の花が咲き、疣だらけの瓜が俳味を帶びて實り、初め青く次第に黄ばみて、熟すれば下の一部より破れはじめ、中より赤い肉が核を包んで重なり合ふのが、頗る美しいのであります、肥えた眞土に五月頃種を蒔きますと、一週間ばかりで發芽し風姿やさしく育つて、盛んに蔓を出し、葉をつけ、花が咲き、瓜になります、肥料はたまに魚の洗ひ汁でもかけてやれば澤山であります。

菜　豆

これも豌豆と同じ趣味で、稚氣を帶びた花と、其實を翫賞します、蒔付は四月の末から五月の初めで、下肥を少しやれば、蔓のあるのは、すぐ支柱のほしくなるやうになり、世話なしに育ちます。

刀　豆

これが前に述べましたやうに、南洋の蘭のやうな花が、鷹揚に咲いて、白と赤と、いづれも見事であります、それに成熟した豆が顔

る雄大で、大に慰められます、四月頃種を胚部を下へ向けて蒔きます、四五寸に成育しますと、支柱をしてやります、花は七月頃から咲初めて、花落からすぐ實になります、肥料は過燐酸石灰か、藁灰などをやります。

扁蒲

樂みはゆふがほ棚の下すゝみ、その白き涼しさうな花、餘念なく成下つた瓜、なか〳〵掬すべき野趣があります、三月頃種を蒔き、本葉三枚ばかり出ますと、心を摘んで枝をふやし、時々水肥をかけてやります、花が落ちて四十日位で瓜が熟し、ほしてそれを干瓢にします、それが一度でもお嬢さん方の辨當の菜にでもなれば、また

格段のお慰みであります。

絲瓜

世の中を何の絲瓜と思へども、といひたさうな顏して、ブラリと成下つた所、これで成熟しました時、其莖を根に近く切つて、瓶へその切口をさし入れて置きますと、それから化粧水にも藥品にもなる水が澤山とれます、その切る時が、月の澄む十五夜であれば、その水が一しほきゝ目があるといふからして、興味を感じられるのでまんざら捨てたものでもありません、濕氣のある所へ、四月頃種を蒔いて、捨てゝ置いても盛んに花が咲いて、末には垢すりになる瓜が盛んに出來ます、それに水肥でもやれば、それこそ素敵でありま

す、棚に這はして日覆にもなり、垣根の端から邪魔にならぬやう屋根へ這はすも妙であります。

玉蜀黍

その幹の雄大なのと、拂子の如き鬚をつけて實を結んだのを包んだ、包み紙やうの幾枚かの皮が、中の實の熟するに隨つて、上部の綻びより、粒々せり合つた實を見せた所、頗る風流味があつて、一本育てゝ見たく思はれます、四月下旬によく肥えた畑地に種を蒔き一二度下肥を施し、濕氣を保たせて置きますと、次第に成長して注文の如く成熟します。

三つ葉

其名の如く三つの葉をつけて、すらりと生へた形が甚氣に入ります、五月頃畑地に種を蒔き、發芽後間引いて水肥を施し、折々鍬を入れますと、秋は立派に物に成ります、乏しき所を浸し物にするか牛肉などの藥味に用ひて、その芳香がよい氣持であります。

防風

刺身のツマに一異彩を放つ、淡紅の氣持よき莖を有する蔬菜で、海岸に自生します、そこで好奇心を起し、庭園の一部を割愛して見たい氣になります、砂地又は眞土に砂を交ぜた畑地に畦をつくつて四月の中頃種を蒔き、發芽してからよき程に間引いて、時々水肥を施しますと、夏から秋へかけて物に成ります。

山葵

清水湧きて流絶えぬ所に、勢よく育ちます、されば自然の溪流を控えて、水の停滯せぬ所があれば至極妙でありますが、それはなか〳〵都會では無理な注文であります、木蔭の濕氣のある所に、春秋の彼岸頃根本から岐れる小莖を取つて植込み、稀薄な水肥をやります、二年立つて其清らかな風姿に接することが出來ます。

唐辛

辛さうな花が、いつか青く、黄いろく、赤くなつて美しく成熟します、土質は砂土まじりの眞土をよく肥して、それに四月の初種を蒔き、稀薄な水肥を時々やります。

慈姑

藪井竹庵老の頭に似た形が、頗る滑稽に感じられます、四月頃根塊を一株一個づゝ、水田らしくしつらへた所に植込み、乾燥せぬやうにしてやります、肥料は過燐酸石灰を少々施すのが、世話がなくてよろしうございます、根塊を水鉢に入れ、金魚などゝ雜居させて葉莖の出づるのを見るのも亦一興であります。

一七 花の住所

花は如何なる所に咲いても、其所を飾つて、行くところとして可ならざるはなしでありますが、家庭に栽培するには、その住所の美

裝さるゝやうにして、花の美をます〳〵發揮せしめたく思ひます、やれ垣に咲ける野菊。竹洩る壁にまつはる薔薇、また必ずしも捨てた景色ではありませんが、それは趣味の變則で、やむを得ぬ成行の出來事で、求めて然く花を飾るべきものではないと思ひます、そこで花卉を愛する人は、花卉の住所に就て、相當の設計があつてほしいのであります。

花園

狹き庭ながらも花卉の配列よく、花卉中心に裝飾されますなら、そはを私は花園と名づけたいと思ひます、既に花園といふ以上は、梅または櫻の如き美しき木花と、薔薇や藤の如く這ひまつはるものと、菖蒲又は水仙の如き池水に緣あるものと、萩女郎花の如く原野の趣あるものと、それ〳〵配合がうまくいつて、餘地又は通路となるべき所は、苔の色滑らかであるとか、芝の露清らかであるとか、如何にも奇麗に整理せられて、一見氣持のよいものであつてほしいと思ひます、如何に之を配置してよいかは、その人々の意匠に任してよいと思ひます。

花壇

これは庭の一部分に、花卉の世界をつくる場所でありまして、市松格子の油紙を天井に奥下りに張つて、遠見の拵へよろしく、とり〳〵の色めづらしい菊の丸また角びんづくり、或は一莖一花の咲く

らべなど、古風に植込むのもあり。地面を花形その他さまゝの格構に線を引いて、色を一つに限つて櫻草などを植込むもあり。季節の花に色分して紅紫艶を爭はするもあり、或は細長く地所を取つて、リボンの如く花の色にて模様を咲かせるもあり。或は絨氈の如く、或は毛氈の如く、濃厚の光澤ある花などで、咲滿たせる仕方もあつて、これ亦花卉を栽培する餘興として、趣味深きものであります。

一八　苗床の温冷

花卉の苗を仕立てる床地即ち苗床に、冷温二つのつくり方があつて、其の設置の巧拙如何で、苗の成育に至大の關係を及ぼすものであります、少しく專門に亘りますが、其概念を得る程度に、少し記して見たいと思ひます。

冷床

これは普通農家で蔬菜を栽培する苗床でありまして、日あたりのよい、南向の地面を求め、その土壤を十分に耕し、それに堆肥を二三寸位置き、下肥をかけ、更によき肥土を篩ひかけて、まづ五寸ばかりの高さに積上りますと、巾は管理に都合よき程に切り、この床地の上一尺ばかりすくやう、左右に棒杭をうち、天井を渡して、上に菰を被せられる設備をなし、日中温かな時には、菰を卷いて充分太陽の熱を受けさせるやうにし、寒い日、雨風の日、または夕方よ

り翌朝にかけて、菰をかけてやります、床地はいつも濕り氣のあるやうにすれば、肥料は施すに及びません、そして普通種を蒔く時季に先つて蒔きますと、收穫も隨つて早く、走りの品は此床に仕立てる事が出來る譯であります。

温床

これは外氣の温度ばかりではなく、それに釀熱の作用を加へて、花卉の發芽を促し、その生育を助けるのであります、温床は冬から春へかけて入用な設置でありまして、北風の防げる建物に、日當りのよい南をあけて、板圍ひ又は藁がこひの風除をたてゝやるのであります、其簡單な一方法としましては、床地を管理よき五六尺の巾

にて、東西に長くつくりまして、其中央を五六寸、周圍を一尺四五寸、即ち山形に穴を堀り、それに腐土、堆肥、厩肥、馬糞などの釀熱する肥料を、一尺ばかりの高さに入れ、その中に細土を盛りますこれが温床でありまして、種を蒔きますと、温熱の發散を防ぐ爲に麥藁などを厚く被せ、又は雨水の浸入せぬやう菰をかけてやりますそして發芽しますと、日中の暖かな間だけ、太陽の熱をあて、地面が乾くと、微温の湯をしづかにかけてやります、こんなことで温床の目的が達せらるゝのでありますが、これを本式にむつかしく設計するに就て、其設計及び諸家の經驗を記すことになりますと、なかなかそれのみでもこの冊子の盡す所ではありません、まづこの邊を